
着鎧甲冑ヒルフェマン

オリーブドラブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

着鎧甲冑ヒルフェマン

【Nコード】

N4865Z

【作者名】

オリーブドラブ

【あらすじ】

高校受験を来年に控えた中学三年生・一煉寺龍太は、近所迷惑なお隣りさんに苦情を言うべく突撃を敢行する。そこで見たものは、町で噂のスーパーヒロインに変身していた——すっぱんぼんの女の子！？ 変態のレッテルを貼られてしまった龍太は、果たして名誉を挽回できるのか！？ そして、彼女が変身するヒロインの姿は一体ッ！？ ついでに、彼女のスリーサイズは一体……あ、石とか投げないで。

事の始まり

「松霧町商店街で火災発生！ 救済の先駆者」 出動じゃ！」
まつぎりちょう ヒルフェマン

湯煙に包まれた空間の中で、老人の叫び声が響き渡る。

しかし、そこに声の主はいない。要するに、何らかの通信機越しに発せられた声なのだ。

その発信源を取り付けたブレスレットを右腕に嵌めた、一人の少女。

彼女は老人の声を聞き取ると、凜とした瞳を鋭く細め、浸かっていた湯舟から身を乗り出す。一糸纏わぬその姿は、さながら人間に生まれ変わったばかりの天女のような。なめらかな曲線を描くその身体は、ある種の神秘ささえ感じさせる。

だが、その目付きにだけは「天女」と呼べるような優雅な印象はない。あるのは、「いざ死地に赴かん」といわんばかりの決意の色だ。

「わかったわ、おじいちゃん……着鎧甲冑ッ！」
ちやくがいかつちゆう

例の老人と機械を通じて言葉を交わすと、彼女は呪文を唱えるかのようにブレスレットに叫び、それを装着した右腕を勢いよく突き上げる。さながら、世に言う「変身ポーズ」のように。

刹那、彼女のみずみずしい肢体は機械の腕輪から飛び出す光に絡み付かれてしまう。その輝きは少女の全身を覆うように広がって行き、やがて光はある形状に固形化していった。

彼女の美しい身体のラインを完璧なまでに維持した、緑と黒を基調としたボディスーツ。さらに、きめ細かく整った目鼻立ちが特徴

の麗しい顔を包み込む、フルフェイスマスク。その口元には、唇をあしらったデザインが施されている。

まるで昔の特撮ヒーローのような、シンプルなそのスーツを一瞬にして身につけた彼女は風呂場の窓を開けると、一切の迷いを感じさせない動きでそこから飛び出していった。

夜の町を暗黒にさせまいと光る、月光や電灯の輝き。それらの他にもう一つ、今宵の景色を明るくさせる光があった。

商店街の一角にある、小さな中華料理店。そこで発生した火事の勢いが、この日の夜を騒然たる状態に叩き込んでいたのだ。

「あそこね……！ おじいちゃん、被害に遭った人は！？」

『今のところは怪我人の類はいないみたいじゃの。——じゃが、火事が起きた店の上の階に逃げ遅れた子供がおるぞ！』

「わかったわ！」

スーツを纏ってからもしっかり装着されているブレスレットを通して、老人が状況を説明する。彼の指示に従って動いている少女は、人間とは思えないような速度でアスファルトを駆け抜けていく。

既に現場では消防隊が駆け付けていたが、火の勢いが思いの外激しく、老人の言っていた「逃げ遅れた子供」がいる階まで辿り着けない事態に陥っていた。梯子車で十分届く距離ではあるのだが、なにぶん煙や炎が強烈で、突入はおろか、近寄ることさえ難しい。放水は既に開始しているのだが、火災が止まる気配は見られなかった。

そこへ颯爽と駆け付けたのが、例の少女——が扮する、謎のヒロインだ。

彼女は自分の登場に驚く人々を尻目に、猛烈な火災に包まれた中華料理店に真っ向から突撃した。

真つ赤な炎に蹂躪された建物を突き進み、灼熱をものとしめない。今の彼女は、まさしく勇敢なヒロインそのものといった出で立ちであつた。

「消防隊が鎮火を始めてるのに、勢いが全然止まらない……きつと、食用の油に引火してるのね」

冷静に物事を分析しつつ、身を焦がさんと暴れ回る火炎をかい潜り、彼女は階段を駆け上がっていく。

例え瓦礫が落ちてきてもパンチ一発で迎撃し、火に包まれても手刀一つで振り払い、足場が崩れても人間離れしたジャンプで危機を脱する。

そんな彼女の快進撃を阻む障害は、ありえなかつたらしい。

やがて到達した目的の階層で、例の子供を見つけた時も……彼女は無傷であるばかりか、息一つ切らしていなかった。

そして少女は無事に子供を救出し、固唾を飲んで見守っていた人々の拍手喝采を背に、夜の闇へと姿をくらました。

全身を謎に包めた、無敵のヒロイン——その存在は、この活躍を通して人々の間に「より」浸透していくことになる。

そんな彼女が満足げに帰宅した頃には、既に時刻は夜の十時を回っていた。クリスマスが近いこの季節に、この時間帯はかなり冷え込む。

自宅の一軒家を前にした少女は、周囲に目撃者がいないことを確認するべく、辺りを見渡す。そして誰もいないことを確かめると、素早く家に入れるようにと開けておいた窓から、速やかに帰宅する。

窓で出入りするのにはよろしくないことだと知っていたが、それでも正体がばれる可能性を最小限に抑える努力を怠るわけにはいかない——というのが彼女の言い分だ。

馬鹿正直に玄関から行き来していたのでは、いつ通行人に見つかって自分の素性が露呈してもおかしくない。それを思えば、多少はしたないことではあっても、窓からコソコソ出入りした方がまだまし、ということなのだ。

そういう事情から、彼女は窓から忍び込む格好で二階の自室に入っていく。そしてサツと窓とカーテンを閉め、辺りをキョロキョロと見回す。

この場に誰もいないのは当たり前で、同居している彼女の祖父——すなわちさつきまで彼女と話していた老人も、今は一階のリビングでニュースを見ている頃だ。

それなのにここまで彼女が気を張っているのは——スーツの下が全裸だからだ。

人命救助という自身の使命を果たした以上、これ以上このスーツを纏う意味はない。無駄にスーツの力を使わない、と決めているからには、帰宅すればすぐにそれを解除するのが筋だ。少なくとも、本人はそう捉えている。

だが、今の彼女は風呂場から咄嗟にスーツを着用して飛び出してきたため、その下にはブラジャーやパンティーすらない。この摩訶不思議なスーツを使つての人命救助活動は、彼女と彼女の祖父がこの町に来た頃から続けてきたことであるが、下着も穿かずに出勤したケースは今回が初めてなのだ。

いつもなら下に普通の服を着ているから、すぐさまスーツを解除できているはずなのに、今回ばかりはそれがままならない。それも

そのはず、彼女はまだ十五歳の思春期真っ盛りなのだから。

——それでも、彼女は自分の決めたことを曲げたくはなかった。そんな頑固なまでの真っ直ぐさは、彼女の取り柄でもあり、欠点でもあるとも言える。

故に彼女はその場でスーツを解除し、自室のタオルで身体を巻いてから風呂場に戻ることに決めた。脱衣所には着替えを置いてあったので、取りに行かなければならないのである。

しかし、その判断はこの時の彼女にとって、最大のミスを招く結果となる。同時に、この物語の起点にも繋がるのだ。

まず、ブレスレットに「着鎧解除^{ちやうがいかいじよ}」と囁く。すると、それに呼応したかのように輝くスーツが、光の幕と化してブレスレットの中に収縮していった。

その光が収まる頃には、彼女は風呂場にいた時と同じ、白い肌をさらけ出した美しい裸身となっていた。すぐさま頬を赤らめ、慌ててタオルを取ろうとタンスに手を伸ばす彼女。

——だが、その手は目的の物を掴む瞬間に、ピタリと止まって動かなくなってしまう。

気配を、感じたからだ。

その出所の方向を、恐る恐る振り向いた彼女。その視界に、非情（？）な現実が突き刺さる。

——彼女と同世代くらいの男の子が、呆然と立ち尽くしていたのだ。

……そう、彼女がスーツを収め、艶やかな肢体をさらしている、この光景を前にして。

こんなボーイ・ミーツ・ガールは嫌だ

少年の名は、一煉寺龍太。いちれんじりゅうた

高校受験本番を来年に控えた、中学三年生である。そんな彼が、自宅の隣にある一軒家のリビングで正座させられているのには、それなりの事情というものがあった。

二学期がもうすぐ終わる、という時期に隣に引っ越してきた救芽井家。めいけその家から度々発せられる激しい光が眩しい余り、隣に住む彼は冬休みに入った今でも受験勉強に集中できない、という苦境に苛まれていたのだ。

龍太や救芽井家が暮らしている、この松霧町まつぎりちょうには密集した住宅地が多い。それだけに、救芽井家の出す光を迷惑がっている住民は決して少なくはないのである。特に、隣に住んでいる上に受験が懸かっている龍太のストレスは大きいだろう。

そんな彼が、苦情を訴えるべく救芽井家に足を運ぶことは不思議なことではないのかもしれない。

救芽井家もそういった反響は覚悟していたらしく、一家の長だといふ六十三歳の老人・救芽井稟吾郎丸は、きゅうめいりんごろうまる何度も苦言を呈する龍太を懸命になだめていた。

彼の温和な人柄が功を奏してか、龍太も「近所のことたまには考えてくださいよ!」と言う程度であり深くは追及してこなかった。しかし、それにも限界がある。

何度文句を言っても光の勢いは止まらず、そればかりか日を追うごとに光が出る回数が増えていく現状に、血気盛んな中学生はとうとう腹に据えかねたのだ。

怒り心頭の龍太は稟吾郎丸の制止を振り切り、光の出所である部

屋——すなわち、稟吾郎丸の孫娘・救芽井樋稟きゅうめいひりんの部屋に突撃したのだ。例の光を止めてほしいと、直訴するために。

そこで見てしまったのが、松霧町で噂のスーパーヒロイン——だった、全裸の少女。思春期の男には刺激的過ぎる出会い方をしてしまった龍太は、顔を真つ赤にして悲鳴を上げる樋稟に蹴り倒されてしまったのだ。しなやかな脚から繰り出す回し蹴りを顔面に喰らい、本番を控えた受験生は努力の成果（記憶）が飛びかねないほどの衝撃を受けることとなった。

事情はともあれ、人の家に押し入って少女の裸を見てしまったことは事実。その償いはあつて然るべきという方針に従い、龍太は今、稟吾郎丸と樋稟の前で正座を強制されている……という次第であった。

「そそ、そりゃあ受験なんだから大変だっていうのはわかるし、悪いとは思うけど……だからって手段は選ぶべきでしょ？ 変態君！」

「ちょ、変態とはいくらなんでも失敬な！ 俺には一煉寺龍太という名前がちゃんとあつてだな！——それに、俺だって予想外の展開だったんだぞ！」

「で、でも見たじゃない！ エッチ！ スケッチ！ ワンダーランドっ——」

「なんだよその夢の国！？ エッチなワンダーランドって——ちょっと行ってみたいんですけど！」

微妙に話が脱線しようとしていた。

「まあしかし、こんな形で外部の人間に知られてしまうとはのう」
そんな二人の平行線（？）な会話を見兼ねてか、稟吾郎丸が口を挟む。ちなみに彼はその人柄と名前の長さから、龍太に「ゴロマルさん」の愛称で呼ばれている。

「そう、それ……。救芽井が変身してたあの姿。あれって、最近町で噂になってるスーパーヒロインだよな？　まさか本物に出くわすことになるとは思わなかったよ」

「く、くつつ……。まさかよりによって、初対面で裸を覗くような変態君に正体を知られるなんてえ……」

勝手に付けられた不名誉なあだ名に、龍太は思わず眉毛を吊り上げた。

「だから、その呼び方勘弁してくれよ！　事故なんだってば！」

「なにがどう事故なのよぉー！　思いつ切り私の身体見てたじゃないっ！　まだ十五なのに、お嫁に行けなくなったらどう責任取ってるっていうのっ！？」

とうとう顔を両手で覆い、泣き崩れてしまう樋稟。女に泣かれてしまつては、龍太としては手も足もでない。

「うつ……。頼むよもう、堪忍してくれよ……」

助けを求める彼は、樋稟の横にいる稟吾郎丸に縋るような視線を送る。

しかし、龍太の腰程度の身長しかないほどの小柄で、サンタのよくなポリウムたつぷりの白髭が特徴の老人は、無言で「お手上げ」を主張するだけだった。

「さっき話したとは思うが、わしらは着鎧甲冑の技術漏洩を防ぐためにこの町に来たのじゃ」

「あ、ああそう！　それそれっ！　あんた達が作ったメカを兵器にしようとする奴がいて、そいつがこの町にいるんだつたっけ？」

せめてもの助け舟として、稟吾郎丸は別の話題を振る。これ幸いと話に乗っかる龍太は、彼らから素性を聞かされていた。あらゆるトラブルや火事に颯爽と駆け付け、人々を救う噂のスーパーヒーローン——その正体を見られた以上、ごまかすことはできないからだ。

ちやくがいかつちゅう

着鎧甲冑——それは、科学者の家系である救芽井家が開発した、最新鋭レスキュースーツの別称である。

かつて地震や火災に苦しめられた経験を持つ樋稟の両親が、「どんな危険な場所であっても、そこで助けを求める人々に手を伸ばせる存在を生み出したい」という願いを込めて、作り出したものなのだという。

着用すれば超人的な身体能力を発揮し、炎も瓦礫も突破してしまう。さらに、エメラルドに輝くブレスレット型ツール「腕輪型着鎧装置」^{△バンド}を介して、粒子化されて収納されている着鎧甲冑を瞬間的に装着することもできる。

防火服の耐久力を超え、機動隊のシールドの硬度を凌ぐ。そしてあらゆる状況で迅速に装着できるこのボディスーツは、まさに人命救助という目的のために創出された存在だと言える。

そして、その第一号は「救済の先駆者」^{ヒルフェマン}の名を与えられたのだった。

「はあ……じゃあやっぱり、武器とか必殺技とかないんだな」

「あるわけないでしょ！」

「速射破壊銃とか」

「何に使うの!？」

「ロケットパンチとか」

「私の腕が吹っ飛ぶわよ!？」

「おっばいミサイルとか!」

「——死にたいの?」

「——サーセン」

……しかし、その技術を救助活動のみに使うことを許さない者がいた。着鎧甲冑のテクノロジーの兵器転用を狙う者が現れたのだ。

その名は古我知剣一^{こがちけんいち}。かつて樋稟の両親と共に着鎧甲冑の開発に

携わっていた青年科学者である。彼は着鎧甲冑の技術を兵器として運用すれば、紛争が絶えない世界各地に救芽井家の技術力を知らしめることができるかと訴えた。

無論、着鎧甲冑の本来のコンセプトから外れたその意見は許されず、ほどなくして彼はクビになってしまった。救芽井家の利益を視野に入れての発言であつたにもかかわらず、開発計画から外されてしまった彼は「報復」を決意。

樋稟の両親を誘拐して松霧町に逃亡し、自らが開発した自律機動兵器を使つての「着鎧甲冑の技術奪取」を目論んだのだ。彼自身を司令塔とした、その機動兵器の集団は「技術の解放を望む者達」と樋稟達に呼ばれている。

その上、古我知は開発計画に参加していた頃から密かに入手していた、着鎧甲冑の設計図を元手に「呪詛の伝導者^{フルフマン}」を開発していた。「着鎧甲冑」の事実上の第二号にして、初の兵器転用を実現させた「凶器」である。

彼はそれを用いて、第一号の「救済の先駆者」を破壊して樋稟と稟吾郎丸を捕らえ、「『救芽井家』の生み出した『着鎧甲冑』の痕跡」を消し去り、自らが第一人者の座に取って代わるつもりなのだ。両親を誘拐された樋稟は稟吾郎丸と共に古我知を追い、住み慣れた研究所を離れて松霧町に身を置いた。かけがえのない家族を救い、守るべき人命を傷つけんとする「呪詛の伝導者」を処分するために

「……そのために、人命救助に勤しみつつ古我知って人を探してるってわけか。苦労してんなあ」

「お、驚かないの？ ていうか、あっさりと思ってるのね……」

「まあ、あんなものを直に見せられたら納得するしかないだろ。――それにさっきのアレで、もうビックリするのが飽きるくらいビックリしたしな」

敢えて目を逸らして、龍太はぽつりと呟く。その言葉の意味に感

づいた樋稟はさらに顔を真っ赤に染めて、抱きしめるように両腕で発育のいい胸を隠した。

「や、や、やっぱり！ 変態君はやっぱり変態君だったのね！」

「だーから！ 事故だって言ってるだろう！ 勘弁してちょーだいよ！ ゴロマルさんからもなんとか言ってくんない！？」

「あいにくじゃが、専門外じゃ」

素っ気ない返答に、龍太は頭を抱えてツーブロックの黒髪を掻きむしる。世間一般の目で見れば「中の下」と判断されるであろう彼の顔は、困惑と焦燥の色に染まりきっていた。

しかし、焦っているのは樋稟も同じである。

彼女の両親は着鎧甲冑を造り出した天才中の天才であるが、彼女自身もまた、十二歳で海外の大学を卒業する程の才女なのだ。

故にその才能を評価されていた彼女は昨年から両親の助手を務め、着鎧甲冑の開発計画を手伝っていた。そんな人生だったからか、彼女には同世代の友人がいない。箱入り娘であったために、男の子など以っての外だった。

そんな樋稟としては初めての「『同世代の男の子』との出会い」……だったのだが。いかんせん運が悪すぎた。

面識のない赤の他人である少年にいきなり裸を見られた彼女は、ひどく動転してしまっすっきり彼を警戒してしまっている。

龍太としても容姿故に女の子と絡んだ経験がほとんどないために、樋稟との出会い方やその後の展開には動揺するしかない……。のだが、彼女の場合はそれを大きく凌いでいた。

「とにかく！ 口外は絶対にしないこと！ いいわね、変態君！」

「わかってるよ。あと、変態じゃないって！」

「いいえ、お父様は言ってたわ！ 『心を通わせずに裸を見ようとする男共はみな変態だ』って！」

「じゃあ心を通わせるためにも俺の言い分を聞いてくれー！」

いくら説得しても変態呼ばわりを止めない樋稟に、頭を悩ませる龍太。

——その時だった。

「まったく……ん？」

ふと、彼はリビングのカーテンに不自然な人影がゆらめいていることに気づく。

首や手足がぎこちなくうごめく、そのシルエットに龍太はえもいわれぬ不気味さを感じた。

「なんだ……？　ゴロマルさんと救芽井の他に、誰がいるのか」

「なに言ってるの？　この家には私とおじいちゃんしかいな——」

そこまで言いかけた彼女が龍太のしている方向に視線を移した時。

絶世の美少女は、焦燥に顔を引き攣らせた。

それはシルエットに気づいた稟吾郎丸も同じであり、状況が飲み込めない龍太だけが首を傾げていた。

「な、なんと……！　まさか、こんなところで挑発に来るとは！」
「くっ！」

樋稟は驚愕の言葉を漏らす稟吾郎丸を一瞥すると、眉を潜めながらカーテンを開けてシルエットの正体を暴いてしまう。

「う、うおわあっ!？」

その正体の異様な風貌に、何事かと正座から立ち上がろうとして

いた龍太は腰を抜かしてひっくり返ってしまった。

「ムンクの叫び」を思わせるような凄まじい形相——を象った鉄仮面に、黒い西洋甲冑で全身を固めたような格好の、人ならざる人。すなわち、例の古我知剣一が擁する自律機動兵器「解放の先導者」リベレイターが現れたのだ。

「『技術の解放を望む者達』……！　いくら夜中だからって……こんな住宅地まで茶々を入れに来るなんて、いい度胸じゃないっ！」「待つんじゃ樋稟！　今、存在が世間に知れたら困るのは向こうも同じじゃ！　どうせ奴らは襲つては来れん！」

「このまま放つてなんかおけない！　私達の都合で誰かを巻き込まないうちに、早く決着を付けないとっ！」

そそくさと窓の向こうから立ち去っていく「解放の先導者」。樋稟はその機械人形を追って家を飛び出そうとするが、稟吾郎丸は必死に制止する。

というのも、あの逃げた機械人形を追っていけば「呪詛の伝導者」と遭遇する事態は、避けられないはずだからだ。現時点において、救芽井家は兵器としての戦闘能力を持った「呪詛の伝導者」に対抗する術を持っていない。

生身の人間に比べてパワーはあるものの、運動性で着鎧甲冑を使う人間に劣る「解放の先導者」はともかく、戦闘用に特化した「呪詛の伝導者」に接触すれば、たちまち「救済の先駆者」はスクラップにされてしまうだろう。

しかし、それ以上に彼女は自分達が造り出したテクノロジーを巡る抗争に、他人を巻き込む事態を避けたいという気持ちが強かった

のだ。

樋稟は稟吾郎丸の小さな体を振り払い、ショートボブの茶髪を揺らしながら、自宅を飛び出していく。

そして、感覚的に関しても物理的にも置いてけぼりを喰らってしまった龍太は――

「た、頼む龍太君！ 樋稟を……あの娘を助けてやってくれい！」
「あー……やっぱそういう展開？」

――わけがわからないまま、樋稟を追うように言われてしまった。
いた。

「……ああもう、なんなんだよ今夜は！ こうなったらあの娘を助けて、変態のレッテルだけでも剥がしてやるっ！」

他所の難しい話は、知識を詰め込もうと必死な受験生にはよくわからない。

それでも、変態扱いされたまま別れることは、仲が悪いまま終わらせることを嫌う彼の性分に反することだった。

龍太は、カーテンが開けられた窓から樋稟が走って行った道を確認すると、愛用の赤いダウンジャケットと黒のフィンガーレスグロ―ブを着用する。

「受験生に面倒事をあてがわないで欲しいね、まったくっ！」
そして両手で頬をパン！ と叩いて気合いを入れ、一人の少女を追って救芽井家を出発していく。

——彼の冬休みの稀少な一時が今、始まろうとしていた。

ひとまず観戦

さてさて……勢いよく飛び出して来ちゃいましたけども。

——目の前で起きてる状況に、俺はどうコメントすりゃいいんだ！？

あの意味不明な機械人形（？）を追って家を飛び出した救芽井の後をつけて、俺は住宅街のはずれにある公園まで来ていた。それなりに雪が降り積もってくれているおかげで、足跡を辿るだけで追いつけたのはラッキーだったんだが——

「たあああッ！」

——眼前で繰り広げられてる乱闘が、とにかく普通じゃなかった。

不気味な格好をした等身大のロボット集団を相手に、パンチやキックをお見舞いしている救芽井——が変身しているであろう、この町で噂のスーパーヒーローイン。

「救済の先駆者」なんて名前を持った彼女の立ち回りは、まさしく悪の組織に立ち向かう特撮ヒーローのようだった。事情を知らなければ、ロケにすら見えるだろう。

「やあああッ！」

……いや、そう例えるには気迫がマジ過ぎるか。公園を舞台に喧嘩だなんて、子供の教育によろしくないなあ。

救芽井に殴り飛ばされた機械人形は激しく宙を舞い、滑り台やブランコにたたき付けられる。当然、それらの遊具はもれなく木っ端みじんに……おいおい、世間に知られちゃまずいとか言う割りには派手に暴れてんなあ。

ま、銃器の類をぶつ放されてないだけマシか。「機動兵器」にしちゃあ、武器とかを使ってる気配はないし……。

「世間に知られたら困るのは向こうも同じ」。確かゴロマルさんはそう言っていたはずだ。

……そうか。なら、目撃者である俺が存在をアピールすれば、少なくとも乱闘を中断させることはできるかもしれない。「向こうも同じ」というからには、救芽井側も機械人形側も目撃者がいるとわかれば、引き上げざるを得ないんじゃないか？

「兵器転用だか情報漏洩だか知らないが！ 人が暮らしてる町ですき放題やってんじゃ——」

そう思った俺は声を張り上げようとして——吹っ飛ばされてきた機械人形の体を顔面にぶつけられた。

「ブファッ!？」

そのまま後ろにひっくり返った俺は、倒れたまま動かない機械人形の下敷きにされてしまう。うげ、重たい……鉄なんだから当たり前か。

俺に乗っかってる奴は体の端々に火花が飛び散っており、現在進行形で救芽井にボコられてる他の奴らと違って、動き出す気配がない。どうやら機能停止してるみたいだな。

救芽井もロボット集団も俺の存在には気づいていないらしく、一般人の危機ほったらかしのままで戦闘に興じている。ロボット共はともかく、救芽井は人命救助が仕事なんだから助けてくれよ!？ トホホ、まさかここまで嫌われていようとは……。

いや、気づいてないだけってのは分かってるけどな？ 初対面が初対面だから傷つくんだよ……。

そんな俺の悲哀をガン無視するかのごとく、救芽井はますます積極的にロボット集団に攻め入っていた。殴られ、蹴られ、投げ飛ばされていくロボット達は、為す術もなくスクラップにされていく。下敷きにされてるせいで、詳しい戦況はなかなか見えづらいのだが……まあ、なんだか優勢みたいじゃないか。まだ例の「呪詛の伝導者」ってのは出てこないみたいだけど、これならひょっとして楽勝なんじゃないか？

他人事ではあるけれど、やっぱりお隣りさんが勝ってくれる方が嬉しい。それに、この一件が解決すれば、救芽井が出す変身の発光に悩まされることもなくなるかも知れないんだから。

うーん、それはそれで救芽井家の人と話す切っ掛けがなくなるわけだから、寂しくなりそうな気はしなくてもない。おっかない救芽井はともかく、ゴロマルさんは割といい人だからなあ。あの人、「受験頑張るのじゃぞ」ってお菓子とかいろいろ差し入れてくれるし。

「……ん？」

すると、今まで引つ切り無しに響き続けていた乱闘の騒音がピタッと止んでしまった。救芽井が勝ったのか？

やっとの思いで、俺は自分を下敷きにしていた機械人形を押しつけ、目の前の状況を確認する。

「解放の先導者」とかいうロボットは全滅し、その屍の上には救芽井が立っている。そして、彼女の視線の先にはピッチリと黒いスーツを着こなした男の人が立っていた。肩まで掛かった焦げ茶色の髪が、なんだかホストみたいだ。

「おやおや、本当に頑張り屋なんだね。樋稟ちゃん」

「剣一さんッ……！」

公園を舞台に、対峙する美男美女。剣一さん……ってことは、あのイケメンお兄さんが例の「古我知剣一」ってことなのか。てことは一連の事件の黒幕……ってことになるんだろうけど、あんまりそういう風には見えないなあ。身長が百六十五センチしかない俺が言うのもなんだけど、見るからになよなよしてる感じだし。

——だけど、救芽井の面持ちはかなり深刻って感じがしてる。万引きがバレた悪戯っ子みたいだぞ。

「あーあー、僕のおもちやを好き勝手に壊してくれちゃって。『解放の先導者』だってタダじゃないんだから、もう少しソフトに扱ってくれないかなあ」

「ふざけないでください！　ここで会ったが百年目、お父様とお母様を返して頂きます。それに、『解放の先導者』のプラントも必ず摘発します」

「おお、怖い怖い……。そんなこと言われると、抵抗しなくなっちゃうなー。僕！」

古我知さんの目付きが、降り積もる雪にも劣らぬ冷たさを見せる。おお……悪い顔してんなあ。

よく見てみると、あの人の右腕には、救芽井が嵌めてるブレスレットと同じようなものがある。色は黒いけど、形状は全く同じだ。「腕輪型着鎧装置」……だっけ？

古我知さんは右腕をゆつくりと自分の胸の前へ上げ、不敵に笑う。

「着鎧、甲冑」

そして、何かを呟いたかと思えば——あっという間に、その姿が光を帯びて変わってしまった。

真っ黒のメカメカしい鎧で全身が覆われていて、見るからに「強そう」なイメージを与えるフォルム。『救済の先駆者』もそうだけど、こっちもなかなか特撮ヒーローみたいでカッコいいデザインではないか。唇があるマスクなのはどっちも同じみたいだけど。

なんか腰に剣とかピストルとか差さってるし、確かに戦闘用って感じの出で立ちだよな……これが例の「呪詛の伝導者」って奴なのか？

いやあ、まさか本物の変身ヒーローを間近で見られるなんて思いもしませんでしたよ。悪者なのが惜しまれるが。

——つか、本当はこんな香気なこと言っていない状況じゃないんだろうな。俺一人が「蚊帳の外」なだけで。

「剣一さん。申し訳ありませんが、あなたの目論みはおしまいです……！」

「試作品のレスキュースーツで、戦闘用のパワードスーツに挑む——か。樋稟ちゃん、君のギャグセンスならM-1が狙えるよ」

冷たい風が吹き渡り、睨み合う両者。

片田舎の小さな町を舞台に、二人の決闘が始まろうとしていた……！

……えーと、俺って何しにここに来てたんだっけ？

これぞKY

公園を舞台にした、無駄に壮大な決闘。

最初に仕掛けたのは、救芽井の方だった。

「はああああッ！」

地を蹴って駆け出す彼女は矢のように襲い掛かる——けど。

「おお、よく見える見える」

感心するような声を上げる古我知さんに、あっさりと投げ飛ばされてしまった。

「あううつ！？」

巴投げを喰らってブランコにぶつけられる「救済の先駆者」。あ、子供達の憩いの場が見るも無残な姿に……。

——それにしても、「見える見える」って……古我知さんは何が見えたっていうんだ？ 救芽井のぱんつか？

確かにそれは、この季節にミニスカを履いていた彼女の自己責任だとは思うが、覗きなんて分別のないことをいい大人がするなんて

「君の対『解放の先導者』用格闘術のデータは全て、この『呪詛の伝導者』にインプットされてるからね。君の動きは僅かなモーションだけでも完璧に見切れるのさ」

——あ、なんか違うっばい。思ったより真面目なものを見ていたようで、なんだか申し訳ないなあ。

考えてみれば、そもそも今の救芽井は変身してるんだから、どんなに頑張ったアングルでもぱんつは見えないはずだ。うーん、知らない間に煩惱が渦巻いていたようだ。

そうやって俺が一人で悶々としてる間に、救芽井が起き上がった。ブランコの鉄柱の部分にぶつかっていたから、さぞかし痛かっただろうに……。

「やりますね。でも、まだまだこれからです！」

あら。なんだか平気でいらっしやるみたい。着鎧甲冑つてずいぶん頑丈なんだな……。

「もう諦めたら？ 大人しく『救済の先駆者』を捨ててくれれば、怪我させずに済むんだけどなあ」

「ふざけないでッ！ お父様達の願いを——そんなことのためにッ！」

「やれやれ……強情っ張りなのは親子そっくりだね」

古我知さんはため息混じりに、腰からピストルを引き抜いた。おいおい、こんなところで発砲する気かよ！？

「させないッ！」

ピストルを使わせまいと、救芽井は再び「呪詛の伝導者」に襲い掛かる。心なしか、「銃声を上げられては困る」と慌てているようにも見えた。

「だよね……僕も使いたくないなッ！」

すると、古我知さんの方も——駆け出したッ！？

「——ッ！？」

銃を撃つのかと思いきや、そのまま突進してきた相手に動揺したのか、救芽井はピタッと動きを止めてしまう。その一瞬の隙を突いて、古我知さんは持っていたピストルの銃身で彼女を殴りつけた。うわぁ痛い！

「あつッ！」

救芽井は思わぬカウンターを喰らい、地べたにたたき付けられてしまう。ちょちょ、これってかなりマズイ状況なんじゃないか！？

「ようやく大人しくなってくれたね。さ、お父様とお母様のところに行こうか」

倒れた彼女の頭を踏み付けている古我知さんが、挑発的に笑っているのがわかる。顔こそ見えないが、声が物凄く得意げになっていたからだ。「どや顔」ならぬ「どや声」か。

「くッ……！ お父様達に怪我はさせていないでしょうね！？」

「もちろん。それに、記憶も消去していないねえ。なにせ、まだ着鎧甲冑の全データを教えてもらってないから」

「私達は、あなたなんかに負けない……！ 着鎧甲冑のテクノロジィを、兵器になんて使わせないッ！」

「わかってないねえ、樋稟ちゃん。この力を売り出せば、儲かるなんてものじゃない。世界の歴史に名を残すことだって出来るかもしれないんだよ？ 世界中の機動隊やレスキュー隊に採用してもらって、配備してもらうだなんて味気ないとは思わないのかい？」

古我知さんはグリグリと救芽井の頭を踏みにじりながら、なにやら難しいことを詰問している。おお……まるで意味がわからんぞ。

「うつつ——名を残す、なんて夢想家もいいところです！ 兵器の歴史に残る名前なんて、私はイヤッ！ お父様も、お母様も、おじいちゃんも、人を救うためにコレを造ったんだからッ！」

悲痛な叫び声を上げる救芽井。く、なんだか放っておけない事態になってきてない？ 俺の良心という名の緊急警報が作動中なんですけど……。

「家族思いだねえ……感動しちゃったよ、僕。じゃあ、せめて家族全員の記憶を均等に消してあげるよ。君だけがかすかに覚えていて、周りが君を忘れてる、なんて嫌だろう？」

「イ、イヤアアッ！ そんなの、そんなのダメエエッ……！」

記憶を消す、という脅し文句が効いたのか、救芽井はかなり怯えている様子だった。「家族全員」てのが痛いんだろうな……きつと、それにしても「記憶を消す」……ねえ。こんな状況じゃなきゃ、

冗談だと笑い飛ばせるんだけど……。

「大丈夫大丈夫。全てが終わった頃には、僕は世界的な兵器開発者として歴史に名を残し、君達一家は「盗作」を企てた連中として刑務所の牢屋行きさ」

諭すような口調で話す古我さんは、戦意を喪失したのかグツタリしている救芽井の頭を掴み上げ、彼女の顔を覗き込む。

「——じゃあ、行こうか。僕の成功のために」

そして、その一言と共に彼は救芽井を抱えてその場から立ち去——

「あー、ちょっとちょっと」

——るってところで、やってしまいましたよ。俺。

明らかに場違いな空気で、俺は道を尋ねるかのようなノリで古我知さんに話し掛けていた。向こうは二人とも俺を前にして固まっている。

たった今、ゴロマルさんを言い付けを思い出した俺も俺だけどさ……そんなにビックリしなくなっただけいいじゃないか。だってほら、ちよつと出遅れたらあのままゲームオーバーになっただけのような気がするし。

「……え？ 変態……君？」

「だあーくあーるあ！ 俺は変態じゃないんだって！ いい加減勘弁してもらえないかね！」

あーもう、開口一番に変態呼ばわりとは血も涙もないな！ 全く、ちよつとかわいそうだったから、助けてやろうって思ったらこれなんだから！

……って、今はそこじゃないっ！

「それからあんた！ 古我知さんだっけ？ さっきから黙って聞いてりゃあ、勝手なことばかり口走りやがって！ 手柄の横取りなんてお兄さん許しませんよ！ ——多分俺の方が年下だけでも！」

ビシッ！ と「呪詛の伝導者」の厳ついボディを指差し、俺は無謀にも啖呵を切る。マスクを付けてるせいで表情は見えないけど、多分両方とも「お前は何を言ってるんだ」みたいな顔してるんだろ
うなあ……。

しょうがないでしょ！？ カッコイイ登場の仕方なんて「咄嗟」には考えつかないんだから！

「……君は、樋稟ちゃんの知り合いかい？」

ドスの効いた低い声で、古我知さんが質問してくる。や、やべえ、超こええ！

「お、おうとも！ 早くその娘を放せ！ じゃなきゃ……」

「——じゃなきゃ？」

「ひゃ、110番するぞ！？」

うぎゃー！ カッコ悪ッ！？

ここまで威勢よく踏み込んでおきながら、肝心なところでお巡りさん召喚かよ！？ 我ながら最低だ！ 俺のバカ俺のバカ！ 早くこの震えた手にあるケータイしまえっ！

「……ふーん。なるほど。樋稟ちゃん、運が良かったね」

ちくしょー、俺のバカ！ アホ！ チキン野郎！ こんな脅しで

悪の親玉が言うこと聞くわけ——あれ？

「きゃっ！」

「警察呼ばれちゃ敵わないからね。焦らず次の機会を待つよ」

「えっ？ ……え？」

古我知さんは救芽井を俺の足元に投げ捨てると……

……帰っちゃった。

遂に俺もヒーローデビュー（笑）

「警察を呼ばれたら困る!？」

公園での乱闘の後、救芽井家に帰ってきた俺は意外な事実を知らされた。

救芽井家と「技術の解放を望む者達」の抗争に、警察の介入はタブーなのだそうだ。

人命救助が仕事の救芽井家が警察から隠れなきゃダメって、どういうことだよ。それに、立派な兵器を抱えた「技術の解放を望む者達」が「警察呼ばれたら困る」って……悪の組織としてそれってどうなのよ。

今度はちゃんと椅子に座らせてもらい、俺は元の姿に戻った救芽井とゴロマルさんの話に応じる。

「剣一さんは『呪詛の伝導者』を最新鋭兵器として、世界の軍需企業に売り出したいだけなのよ。だから、その前に警察にマークされて身動きが取れなくなる事態を避けようとしてるの」

「だから俺が通報しようとしたら、あっさり逃げちまったのか……じゃあさ、なんでこっちから警察に相談しないんだ？ 人質取られてるからなのか？」

デリカシーのない質問かも知れないが、正直気になって仕方がない。この一件が片付かないうちは、おちおち受験勉強もしてられないだろう。

「それは違うぞい。剣一は着鎧甲冑のデータを元に『呪詛の伝導者』を造ったが、そのデータ自体も完全なものではないんじゃない。奴はより完璧な兵器を造るために、息子夫婦をさらった……じゃから、警察を呼ぼうが呼ぶまいが、奴が息子達からデータを聞き出すまでは

余計な真似は出来ないんじゃないよ」

「だったら……！」

「……でも、私達も警察には頼れない。もし警察にこの件が知れたら、どちらも不利になってしまうのよ」

やるせない顔をして、救芽井は俯いてしまう。そうしたいのはやまやまだけど、って顔してるなあ。

「どういこうった？」

「強引な手段だったとは言え、私達の造ったスーツが兵器に利用されようとしているのは事実よ。警察に助けを求めたら、『解放を望む者達』は簡単に解体できるけど、私達のしてきたことまで危険視されるかも知れないのよ」

「そうなればマスコミにも知れて原因を追及されかねんし、結果としてレスキュースーツとしての採用が認められなくなる可能性があるのじゃ。兵器に使われるような危ない技術なんぞ使えるか、とな」
「……なんとまあ、せちがらい事情があつたもんだ。それで、警察は当てに出来ないってことになるのか。」

「でも……それじゃあこれからどうするんだ？ さっきの戦いを見る限りだと、普通にやって勝てる相手だとは思えないんだけど。それに、戦える人が女の子だけってのもなあ」

「それなんじゃが——話があるんじゃない。龍太君」

「……え？」

薄暗く、冷たい空間をスポットライトが照らす。その光の中に、俺は連れ込まれていた。

——「腕輪型着鎧装置」を付けて。

「なんだか、ますますややこしいことになってるなあ……」

『ぶつくさ言わない！ 早く着鎧しなさい！』

ブレスレットに取り付けられている通信機から、救芽井の叱責が響いて来る。うう、耳が痛い……。

それから、どうやら「救済の先駆者」に変身することは「着鎧」って言うらしいな。

ゴロマルさんの頼みと言うから何かと思えば、いつの間にか救芽井家の地下室まで連行されてしまっていた。なんで一軒家にこんなもんがあるんだよ……まさか造ったのか？

『ちなみに、その秘密特訓部屋はわしが造ったのじゃ。どうじゃ、イカしておろう？』

やっぱりか。でも特訓部屋にしちゃ何もなくて、なんだか寂れてるぞ……よっぽど使う機会がなかったんだろうな。

それから、この場に二人の姿はない。リビングにあるコンピュータから、俺の状況をモニターしてるのだそうだ。

『よいか？ これから君には鹵獲した「解放の先導者」と一対一で戦ってもらう。先程話したと思うが、これは君自身のためでもあるのだからな』

「わかってるよ。さっさと始めてくれっ！」

あーもう、なんでこんなことになっちゃったんだか。

……まあ、これは俺が古我知さんに声を掛けちゃったせいなんだし、致し方ないのかもな。

どうやら、公園の一件のせいで俺までもが「技術の解放を望む者達」のターゲットに入れられちゃったらしい。

向こうは死人や行方不明者を出して、警察沙汰になるのは防ぎたいのだから、別に捕まっても命は取られない——とのことだが、代わりに自分達と関わった記憶の一切を消してしまうのだという。

しかも、その余波でそれ以前の記憶まで持っていかれる危険性であるとか。正直、それは俺にとつての死活問題になりかねん！

この数ヶ月、なけなしの脳みそをフル回転させて励んだ受験勉強。その努力の結晶を、わけのわからんサイエンス集団に搔つ攫われるなんて御免だ！

——ということで、俺はいざ「技術の解放を望む者達」に狙われても自分の身を守るようにと、救芽井も学んだという「対『解放の先導者』用格闘術」の訓練を受ける羽目になったわけだ。今回は、そのために「解放の先導者」の強さをまず知っておくことが目的らしいのだが。

しかし、「格闘術」かあ……。残念ながら、俺には本格的に格闘技を学んだ経験がない。せいぜい、少林寺拳法しょうりんじけんぽうを嗜んでる兄貴から「申し訳程度」の護身術を教わってるくらいだ。

ケンカだつてろくにしたことがないんだぞ。こんな俺に、なにをやれってんだかな……。

『何をボサツとしてるの、変態君！「解放の先導者」が来るわよ！』

自分の無力さに嘆息してる暇もなく、向かいの扉からおつかない顔をした機械人形が、フラフラと這い出して来る。うげえ、人間じゃない分余計に気味が悪いなあ。

「やるしかないな……。よし、着鎧甲冑ッ！」

俺は「腕輪型着鎧装置」にあるマイクに、勢いよく音声を入力する。

すると、目の前が真っ白な光に覆われ——気がつけば、俺は「救済の先駆者」の姿に成り果てていた。昨日まで、この姿をテレビや新聞で眺めてるだけだったのが嘘みたいだな……。できるだけ全身を見渡してみると、スーツが俺の体に合った形になつてるのがわか

る。

これが現実であると確認するために、俺は機械の鎧に包まれた両手で、頬を叩いてみる。微妙に衝撃は感じるけど……全然痛くない。改めて着鎧甲冑の凄さに感心していると、『実戦でそんなことしてる暇なんてないわよ！』と救芽井に怒られてしまった。ああそうだった、俺って今戦わなくちゃいけないんだっけ。

実戦を演出するためなのか、「解放の先導者」との戦いはゴングもなしに始まった。姿を見せるなり、奴はいきなり襲い掛かって来たのだ。

「解放の先導者」は両手を広げて、覆いかぶさるように迫って来る。それに対して、俺は両腕で頭を守るようにしながら、右足の膝を上げた。少林寺拳法で言うところの、「待ち蹴^{げり}」の体勢だ。

相手が仕掛ける瞬間、こっちから蹴りを決めて距離を取る——言うなれば、「カウンター」の技だ。

少林寺拳法には「守主攻^{しゅしゅこうこう}従^{じゅう}」という、守りを第一にした原則ってものがある。自分からガンガン仕掛けるやり方は、俺には合わないってことだ。

「はッ！」

早すぎればかわされ、遅すぎれば攻撃を喰らう。そんな微妙なタイミングで、俺は短い気合いの声と共に、上げた膝を伸ばして蹴りを放った。

金属同士が激しく接触する音が鳴り響き、奴の突進が止まる。や、やった！ 決まったぞ！

『……ほほお』

通信機越しに、ゴロマルさんの感嘆の声が聞こえて来る。どやっ！ 兄貴仕込みの蹴りの味はっ！

……などと喜ぶ暇もなく、再び奴は俺に向かって来た。おいおい、一応みぞおちは狙ったはずだぞ！？　もう少し痛みにも悶えてもいいんじゃないか！？

「――くそッ、なら！」

でも、今は焦ってる場合じゃない。

俺は二、三步距離を取り、今度は左足の膝を思い切り上げる。さらに、その向きを右斜めに曲げた。

空手にもある、人間の顎にある急所「三日月」みかつぎを狙い撃ちする「三日月蹴り」だ。顎の横を薙ぎ払うように蹴る技なのだが、これは急所を狙うというだけあって危険なものでもある。

だけど、相手は人間じゃない。人間みたいに動くだけの、機動兵器に過ぎない！　ならば、手加減は無用ッ！

「だああッ！」

スパツと振り抜かれた俺の蹴りが、奴の顎を掠めていく。そして機械人形の鉄の首は、関節技でも決められたかのように、グキッとひん曲がってしまった。

うーむ、後味は悪いが……これならダウンは必至だろう。初陣は白星で確定だ！

と、思っていたのに。

「う、嘘ッ！？」

奴は何事もなかったかのように、ガシヤリと首を元に戻してしまっただ。そして、指先から鋭利な爪を出したり、胸から機銃のようなものをガチヨンと出現させたりして来た！

ちょっと待て、お前それでも人間か！？

——あ。

——人間じゃ、ありませんでしたね……。

ぴぎゃー！。

いざ名譽挽回！……させて下さいな

結局、あの後は散々だった。

爪で引つ搔かれるわ、機銃で蜂の巣にされるわ。しまいには気を失ってしまい、気がつけばリビングのソファ―に寝そべっていたのだ。

当然、救芽井さんはお怒り。両親が手塩に掛けて作り上げた「救済の先駆者」を傷物にされたんだから、当たり前か……。

「全く！　いくら初めてだったからって、たった一体の『解放の先導者』に手も足も出ないなんて！　それでも男！？」

「男だからって皆が皆強いわけでもないだろう……。だいたい、なんでわざわざ俺を鍛えなくちゃいけないんだよ。お前が古我知さんに勝てる作戦を立てれば済む話じゃないのか？」

酷い言い草の救芽井に対し、俺はちよつとばかり拗ねた態度になる。

考えてみれば、俺が狙われているからといって、必ずしも俺自身が着鎧して戦わなくちゃいけないことにはならないはず。むしろ、俺を巻き込んだ形になる救芽井側が責任を持って、護衛するのが筋じゃないのか？　情けないかも知れないが、こっちの着鎧甲冑が救芽井の持つ「救済の先駆者」しかない以上、俺が生身の状態で「解放の先導者」に出くわしたって敵いつこないのは一緒なんだし。

いちいち素人をしごいて戦えるようにするくらいなら、足手まといをほつたらかして打開策を探す方が建設的な気がする。うう、自分で言つて悲しくなってきたぞ……。

俺が抗議の声を上げると、彼女はバツが悪そうに目を背けた。気のせいかな、その頬はほんのりと赤みを帯びている……。よっに見える。

「そ……そんなの簡単に行かないわよ！ それに、お、男の方が力が強いんだから、鍛えさえすれば効果的かも知れないじゃない!?」
しどろもどろしつつも、俺の前で腕を組み、仁王立ちする彼女。
おお、けしからん程のポインが寄せて上げられ、揺れておる……。

「ご両親の助手とかやってた天才少女にしちゃあ、ずいぶんと曖昧な返事だなあ。結局のところ、俺をおちよくりたかったただけなんじゃないか?」

「違うわよ！ そんなことのために、あなたに——あなたなんかに、『救済の先駆者』を貸すと思う!?!」

俺が皮肉っぽく尋ねると、今度はキツパリとした態度で否定された。その表情には、「先程の発言を許さない」という強い意思表示がなされている。

自分の本気を否定されたような……そんな顔だ。

「そんな言い方は二度としないで！ 私は、私は真面目につ……!」
「真面目に?」

「も、もう、知らない！ 変態君のバカッ!」

ぐはあ、「変態」と「バカ」の二重心理攻撃があ……。

精神を撃ち抜かれ、ショックに襲われた俺はソファーから転落する。そんな俺を一瞥した救芽井は、顔をかすかに赤らめつつ「フンッ!」と鼻を鳴らして去ってしまった。

数分の回復期間を経て、なんとか心理的ダメージから立ち直った俺は、パソコンに向かって黙々と何かの作業をしていたゴロマルさんを見つける。その傍らには、何かのチューブで繋がれた「腕輪型着鎧装置」が伺える。

あのパソコンを使って、彼は事件や事故を迅速に救芽井に知らせて、出勤を促したりしているらしい。今は俺が傷つけてしまった「救済の先駆者」を修理しているのだという。

「君も苦労しとるのう」

「……ども」

顔を合わせずキーボードを打ちながら、ゴロマルさんは呆れたような声で俺を労う。気に掛けてくれるのは嬉しいんだけど、巻き込んだのはあんた達ですからね？

去年までの冬休みならいざ知らず、受験シーズンのタイミングで漫画みたいな世界観に連れ込まないで欲しかったなあ。せめて春休みまで「技術の解放を望む者達」には大人しくしてもらいたかった……。

「はあ……」

思いつ切りうなだれながら、俺は窓の外から近所の様子を伺う。そこでは、小さな子供がお父さんやお母さんに囲まれ、にこやかにクリスマスツリーの飾り付けに励んでいる姿があった。それに、お熱いカップルが住宅街を闊歩している様子も伺える。

そういえば、もうじきクリスマス……なんだっけ。

——何がクリスマスじゃあい！　ちくしょおおおお！　俺は恋人作ってデートどころか、初対面のお隣りさんに「変態」呼ばわりだよッ！

「……なにしとるんじゃ？」

気がつけば、俺は窓にベツトリと張り付いて啜り泣いていたらしい。ゴロマルさんの哀れむような視線が痛い……。

「樋稟にも困ったもんじゃ。君を過剰なまでに意識してしまったばっかりにのう」

顔を赤らめつつ、イライラした表情で床をトントんと蹴っている救芽井。そんな彼女の様子を、ゴロマルさんは心配そうに見つめている。

しかし、イマイチわからない。俺を意識してるってだけで、こんな面倒事の渦中に人を叩き込むのかよ？

「それって、俺が裸見ちまったせいかな？」

「じゃな」

じゃなって……そんなストレートに肯定しなくたっていいじゃないか。確かに悪いのは俺だろうけど、一応は事故なんだしい……。

「ああなつた以上、救芽井は君に望むしかなかったんじゃろうな」

「何を？」

俺が尋ねてみると、ゴロマルさんは達者な髭を撫で回しながら、いたずらっぽく笑う。

「王子様じゃよ」

「——は？」

翌日。

いろいろと衝撃的過ぎる夜を終え、朝日が真つ白な雪を輝かしく照らす頃。

俺はお隣りさんの女の子——救芽井と一緒に、町を歩くことになっていた。

夕べにゴロマルさんに言われたことが、全ての始まりだった。昨晩の悪夢のようなやり取りが、ついさっきのことに思い出される……。

「樋真は息子夫婦の夢のために、正義の味方となってこの町を守っておるが……あの娘自身としては、本当はそんな王子様のような存在に救われる、『お姫様』になりたかったのじゃよ」

「ちょっと待った、なんでそれで俺が王子様……もといヒーローにならなくちゃいけないんだ？」

「君が槌稟にとつての、初めての『男』だったからじゃな。自分にとつての『王子様』がするようなことを、それまでに必要な過程をすつ飛ばして実行してしまった君に、相応の責任を取ってほしかったのじゃろう」

「それで自分を守るくらいには強くなれ——っという理屈に発展したのか？ 無茶苦茶だな……」

「夢見る女の子というのは、そういうものらしいからの」

——というわけで、俺はメルヘンチックな夢の道を絶賛爆進中の救芽井さんにお応えして、彼女を守るヒーローを目指すことを余儀なくされてしまったわけだ。

朝の九時に待ち合わせていた俺は、十分前には既に救芽井家の前まで向かおうとしていた……のだが、彼女はそれよりも早く家を出て俺を待っていた。

「来たわね。いい！？ 自分の身も守れない一般人のあなたを、みすみす『技術の解放を望む者達』の脅威に晒さないための護衛任務なんだからね！？ 勝手に私から離れちゃダメよ！」

「……！」

そこで俺は不覚にも、緑のトレンチコートにミニスカートという、救芽井の女の子らしい格好に思わず目を奪われてしまう。

茶髪のショートと凛々しい目鼻立ちが合わさって、大人っぽさと愛らしさが共存しているかのような、そんなアンバランスな魅力が保持されていた。

それが意識的なものなのかはわからないが、少なくとも俺と同年のようには、到底思えない風格がある。

「へいへい」

そんな心の（やましい）動揺を気づかれまいと、俺は目を背けてわざとめんどくさそうに返事する。すると、向こうはムツとなって

眉を吊り上げる。

「あと念を押して言うけど——これはデートじゃないんだからねっ
!?!」

「わかってるよ……」

ものすごく顔を真っ赤にして、救芽井は俺を威嚇するかのよう
に思い切り指差して来る。ここまで警戒されてるのかと思うと、心
がえぐられるようだ……。

やっぱり、俺って嫌われてるんだなあ。彼女と対話する度に、
いちいち思い知らされる。

初対面がマズ過ぎたつてもあるんだろうけど、彼女が男をろく
に知らなかったっていうのが何より痛かったんだと思う。そりゃあ、
初めて見た同年代の男にいきなり裸を見られちゃあ、ビクビクもし
ちゃうだろう……。

だけど、このままじゃいけないってのは確かだ。この娘の王子様
になってあげる——なんてのは、俺みたいなジャガイモ男には似つ
かわしくなさ過ぎるけど……それでも、出来る限りの責任は取ら
なくてはなるまい。

そのためにも、そして俺自身の名誉のためにも、「変態」呼ばわ
りからは必ず脱却しなくては!

「な、なあ救芽井? まずは仲直りから始めようぜ。とりあえず俺
のことは、ちゃんと一煉寺って——」

「さあ! まずは昨日火事起きた商店街のパトロールね。行くわ
よ変態君!」

俺の名誉挽回への第一步をアッサリと踏みにじり、彼女は茫然と
している俺の手を引きながら、ずんずんと進んでいく。

あうう、前途多難ってレベルじゃねーぞ……。

こんなデートは絶対おかしいよ

夕べ、火災が起きていたという商店街。その現場には、警察やら野次馬やらがあちこちうろついていた。

俺は若干黒焦げになってしまった建物を見上げつつ、真剣な眼差いでそれを眺める救芽井の様子を、チラチラと横目で伺う。

ブスツとした表情で腕を組む彼女の手首には、一晩で修理を終えていた「腕輪型着鎧装置」がある。ホッ、どうやら簡単に直ったみたいで一安心だ。俺のせいで使い物にならなくなったりしたら、コトだもんな。

「くっ……『技術の解放を望む者達』……!」

苦虫を噛み潰したような顔で、彼女は建物から目を離さない。自分が解決させた後のことが気になって、ここに来たんだろうなあ。

昨日の夜中に起きた火災で、噂のスーパーヒロイン——つまり彼女が着鎧する「救済の先駆者」が活躍していたことは、今朝の朝刊にしっかり取り上げられていた。

「巷で噂のスーパーヒロイン、またまた大活躍!」……という見出しはもう見慣れたつもりでいたのだが、今になって読んでみると、友達が新聞に載ったかのような感慨深さを感じてしまう。いや、別に彼女とは仲良くないんだけどね。それどころか——

「ちょ、なにジロジロ見てるのよ! こんなところで、いやらしいわよ変態君!」

——ご覧の有様だし。

道行く人々の雑談に耳を傾けてみれば、皆口々に救芽井のことを

噂してるのがわかる。まさか巷で噂のスーパーヒロインが、俺の隣でイラついてるアブない美少女だとは夢にも思っまい……。

頭脳明晰、容姿端麗、身体能力抜群……なのは確かなんだし、その辺が完璧なのはわかるんだけど——ただ性格が、ちょっとね。

救芽井は胸を両腕で隠しながら、キツい視線を送って来る。俺が胸をガン見してると思ってるらしい。——おいおい、確かにけしからんおっぱいなのは認めるが、そこまでしなくたって見えるわけないだろうが……。

しかし、コートの上からでもわかる程の大きさとは——思わず腕を上げ下げして「おっぱい！ おっぱい！」と歓喜したくなりそうだった。

「全く……。もう、行くわよ！ 迷子になっても知らないからっ！」俺に見られてることが堪えられないのか、彼女はいきなり速いペースで歩き出してしまった。ちょっと待て、自分から離れるなどか言っというて、それはないんじゃないの？

救芽井は置いてけぼりな俺を放置して、ツカツカと先へ進んでいく。クリスマス前で賑わってる今の商店街は、人通りが多い。このままじゃあ彼女の言う通り、はぐれて迷子になっちまう！

「ちょ、待ってくれよお！」

俺は火事の跡を一瞬見遣ってから、すぐさま彼女を追いつけた。

——追い掛けたのだが。

「見失っちゃいました……」

はい、終了。

……って、人通りの多い時期に一人で飛び出すとか無情過ぎるだ

るッ！ どうやって探すんだ？ この状況……。

「小さい町だから、いつもなら人通りなんてあつてないようなものなのに。よりによってこの時期にとは……恐ろしい間の悪さだな」

この場に彼女がいないのをいいことに、俺は思いつ切りため息をつく。商店街に来る途中、昨日の散々な扱いに辟易していて「朝から辛気臭い顔しないッ！」と平手打ちを貰ったことがあるからな。今ぐらい（精神的に）一息ついてもバチは当たるまい。

……そういえば、救芽井はどこに行こうとしてたんだ？

ふと、それが気になって、彼女が向かっていた方向を見つめていると――

――ぬいぐるみ屋が目に入った。

まさか、あそこに行きたかったとか？ 町の平和を守る、正義の味方が？

いやいや、ないない！ だって、あの生真面目スパルタおっぱい星人だぞ！？ それに、今日は商店街の「パトロール」だって本人も言ってたし！

……でも、もしかしたら、ついで見に行きたかったのかも知れないな。それに、二学期の終わりにこっちに引越してきたんだから、この町をよく知らないはず。ひよつとしたら、パトロールを兼ねて、この辺りを散歩してみたかったんじゃないか……？

正義の味方だろうとボインちゃんだろうと、俺と同じ年頃の女の子には違いainだらうし。うーん、わからなくなってきたぞ。

――あれ？ ちょっと待てよ……。

あの娘って、この町に来て日が浅いはず。

最近来たんだから、この時期は人通りがやたら多いってことも、多分知らない。

地元の人間（ここでは俺）と離れて、単独行動。

そして、なかなか帰ってこない。

……。

もしかしたら……いや、多分そうだ。

俺は迷わず、商店街の近くのとある場所へ向かった。救芽井がそこにいる、と確信して。

その確信は、やはり的中していた。

商店街の傍にある、小さな交番。そこには、真つ赤な顔で俯くスパーヒロインの姿があったのだ。

「お、おそ、遅いわよ変態君！ 迷子になってたらどうしようって心配してたのよッ!？」

「あー……いや、どの口が言っただ？」

ろくにこの町を知らない奴が、知ってる奴のもとを離れて、人通りの多い時期にうろついてたら、そりゃ迷うわッ！

当の迷子の子猫ちゃんは、さも自分は迷ってなんかいないと言わんばかりに、ふくよかな胸を張ってるし……おお、揺れてる揺れてる。

ゴ、ゴホン。とりあえず、目の保養にはなっただし、今回のところは目に見てやるか。知らない町での暮らしで、不自由が多いのは仕方ないんだし。

「お、迎えの人かい？ ……つて、龍太君じゃないか！ お兄さんは元気にしてるかい？」

「あ、どうも。ええ、今頃は就活でバタバタしてるでしょうね」

「ハッハッハ！ 出来れば龍亮君りゅうすけにも警察になってもらいたいなあ

！ なにしろ、交番勤務は大変でねえ。とにかく人手が欲しいんだよ」

「兄ですか？ あいつはわりかしフリーダムですから、多分向いてないですよ」

迷子になっていた救芽井を預かってくれていたのは、顔見知りの若いお巡りさんだった。松霧町自体が小さな町だから、俺はこの知り合いが結構多い。ゴロマルさんと知り合ったのも、彼ら一家がこの町に引っ越してきてすぐのことだった。救芽井と会ったのは昨日が初めてだが。

「そうかあ……にしても、君も隅に置けなくなっただねえ！ こんな超ブリティな彼女捕まえるなんて！」

「ちょ、声が大きいですって！ それに彼女じゃ——」

「断ツツツじて違いますッ！ 誰がこんなドツ変態君ッ！」

軽く冷やかすお巡りさんを止めようとした時。これ以上は生物学的に不可能というくらいに、顔を真っ赤にした救芽井の怒号が、俺達二人の鼓膜に突き刺さる！ キーンと来る聴覚の痛みに、俺もお巡りさん思わず尻餅をついた。

ひぎい、ついに「ド変態」にランクアップかよう……。

「か、彼女じゃない？ それじゃあ誰だい？ こんな綺麗な娘、なかなかいないし……」

「ただのご近所さんですよ……！」

耳を抑えながら、俺は消え入りそうな声で必死に弁明する。

敢えて、「最近引っ越してきたお隣りさん」とは言わない。口にすれば、例の迷惑発光の元凶と知られ、彼女がクレームを受けてしまうからだ。夕べ、俺がそうしたように。

そうなれば、「変態」からの脱却が不可能になってしまうだろう。

彼女達の都合上、光を止めることは出来ないし、それならクレームの末に、町を追い出されることになりかねない。

発光に悩まされることはなくなるが、嫌われたままで別れるのは後味が悪すぎる。そんなの、俺は絶対に嫌だ。

だからこそ、俺は彼女に応えなきゃいけない。どうせ近所付き合いでするんなら、仲良しな方がいいに決まってるんだから。

「そ、そうか……ちょっと残念だよ……」

「なにがですか、もうッ……！」

聴覚をやられ、悶絶必至な俺達。その様子を、救芽井は拗ねた顔で見下ろしていた。

「し、信じられない！ 何が彼女よ……もうッ！ とにかく、さっさと行くわよ変態君ッ！」

彼女は俺の腕を引っつかみ、ズルズルと引きずっていく。俺は強制連行されつつ、既にグロッキーだったお巡りさんに別れを告げた。

それから商店街に戻ってきた救芽井は、またも同じ方向へ向かうとしていた。彼女の視線を追っていると、やはりぬいぐるみ屋に注目しているのがわかる。

やっぱり女の子だなあ……。

「な、なによ？」

いつの間にか、彼女の顔をまじまじと見ていたらしい。俺はそくさと視線を正面に戻し、話題を出すことにした。

「何でも。それより、さっきの焼け跡以外にどこを『パトロール』するんだ？」

「う……！」

俺が振った質問に、彼女は言葉を詰まらせた。はーん、さては真面目な「パトロール」は、火事現場のことくらいだったんだな。

「ついで」どころか、散歩の方もかなり重要だったらしい。

「……あ。そういえば、あんたってあんまりこの辺には来たことないのか？」

「しょ、しょうがないでしょ！？ 出勤時以外は、専ら地下室で訓練してるだけだったんだし……」

ちよつとかわいそうな気がしたので、別の質問にしてみる。すると、今度は割とまともな答えが返ってきた。

——なるほど、あの薄暗い部屋にねえ。道理で、お隣りさんなのに昨日まで一度も顔を会わさなかったわけだ。

にしても、この反応……よっぽど、迷子になったことを気にしてるんだな。同じ失敗をしたくないのか、微妙に俺の袖を掴んでるのがわかる。

でも、プライドに障るのかしつかりとは掴んでない。指先で、ちょいと摘んでる感じだ。

表情も、「仕方なくよ、仕方なく！」といったげ。見ていて、正直めちやくちやじれつたい。

「だーもう、まどろっこしいなあ」

俺は間の抜けた声で、一瞬彼女の摘んでいる手を払い——その手をしっかりと掴んだ。

「き、きやあつ！？ なにするのよ変態君ッ！」

「——ぬいぐるみ屋！」

「……え？」

「行きたいんだろ？ 一緒に見てやるから……離すな」

怒られるのは覚悟してたけど、やっぱりハッキリと言ってしまった方が気分がいい。救芽井はボツと顔を赤くして抵抗していたものの、やがてシウルシウルと大人しくなり、俺の言葉に小さく頷くようになった。

よ、よかったあ……。これで「はあ？ なに勘違いしてんの？」とか言われたらトラウマもんだったわ。まあ、それなりに確信はあったんだけどね。

その後、ガラス張りの奥に陳列された、可愛らしいウサギやクマのぬいぐるみに夢中になる彼女の姿は、かなり意外だった。

その様子は、無邪気にぬいぐるみと戯れたがる、小学生の女の子と大差ない。いつもの強張った顔とは全く違う、なんだか「自然」な感じの笑顔を見ることが出来た。

——そういえば、救芽井の笑顔なんて初めて見たな……。スツゴく可愛いし、綺麗だ。改めて、彼女がアイドル顔負けの美少女なんだって事実を思い知らされる。

「ねえ、変態君」

嬉々とした面持ちで、救芽井が話し掛けて来る。笑顔で変態呼ばわりは、なんか今まで以上に突き刺さる……。

「な、なんだよ？」

「ぬいぐるみ、どれがいいって思う？」

「はっ？」

妙な質問に目を丸くする俺に対し、救芽井はフツと微笑んだ。なんだこの笑顔。天使か？

「今日買っぬいぐるみ。ご褒美に選ばせてあげるわ」

「なん……だと」

マズい！ 俺はぬいぐるみを選別するスキルなんてカケラも持ち合わせていないというのに！

し、しかしここで失敗したら、「変態」呼ばわりの汚名返上が遠退いてしまうッ……！

「うーん、参ったな……俺、人形なんてちんぷんかんぷんだし」

「別に何でもいいわよ。あなたが可愛いつて思うものを選んで」

「そ、そうか？ だつたら——」

直感で、行くしかない。

俺は腹を括り、一番それっぽいのを指差した。

「——この、緑のリボンのウサギ、かな」

俺が選んだぬいぐるみ。

それは、耳の辺りに大きな緑色のリボンを付けた、デカイウサギだった。

「あ、ホントだ！ これ可愛いっ！」

救芽井は昨日までとは想像もつかないテンションで喜び、ガラスをバンバンと叩く。おい、可愛いのはわかったから落ち着きなさい！

「でも、どうしてこれがいいの？」

彼女はようやく叩くのをやめたかと思うと、今度は真ん丸な瞳で俺を見上げて尋ねてきた。あの鋭い眼光はどこへ！？

「ん……このウサギの白がさ、なんかあんたの肌みたいで綺麗に映ったんだ。それに、リボンが緑なもの『救済の先駆者』っぽくていいだろう？」

と、俺はつい思ったままの理由を述べてしまった。

——ああ、マズい！ マズいぞ！ リボンはともかく、「肌」はマズい！ イケメンならまだしも、ブサメン予備軍の俺がそんなこと口走ったら犯罪にしかない！ 「ド変態」からのさらなるランクアップがきちゃうつつう！

「……っ！」

救芽井は目をさらに丸くして、赤い顔のまま俯いてしまった。声にならない叫び声を上げて。

「あ……」

そして、なにかを言おうと口を開いた！

いやあああ！ やめてえええ！ 変態以上なのはわかったから、
もう何も言わないでええええッ！

そして、俺が耳を塞ごうとした時――

「……………」ありがとう

――信じがたい台詞を、彼女は言い放っていた。

その後、俺達は買ったぬいぐるみを抱えて昼間には帰路についていたのだが、その間一言も言葉を交わさなかった。

行きの時は、昨日のボロ負けのことでガミガミ怒られながらも、
いろいろなことを教えてくれていたのだが。

――彼女によれば、商店街の火災も「技術の解放を望む者達」の
仕業らしい。俺は拝見する前に気絶してしまったのだが、「解放の
先導者」には火炎放射器まで組み込まれているのだとか。恐ろし過
ぎる……………。

救芽井は顔を赤くして目を合わせてくれないので、俺はこうして
会話が出来ない代わりに、今朝の話題を思い起こして帰るまでの時
間を潰すしかなかった。

にしても、あの火事が「技術の解放を望む者達」の仕組んだこと
だったとはね……………。死人も怪我人も出なかったから良かったものの、
こりゃあ大変なことになってきたもんだ。

救芽井が言うには、人殺しを目的としない「技術の解放を望む者
達」が火事を起こしたのは、「救済の先駆者」をおびき寄せて、運
動能力のデータを調べるのが目的だった……………という可能性が高いら

しい。向こうは、救芽井が死人を出さないようにすることも計算済みだったってことか。

それに「偶然、火が油に引火した」と思わせるように火炎放射器を使えば、「解放の先導者」の存在を知らない人々は「放火」だとは思わない。だから、仮に死人が出たとしても「技術の解放を望む者達」が世間に取り沙汰されることもない。

——なんとも、セコいことをするもんだなあ。さすが悪の秘密結社（ただし人間は一人だけ）。

ところで、そういうハードな話を朝っぱらからする救芽井だったけど、蓋を開けてみれば結構女の子らしいところもあるじゃないか。ちゃんと彼女の事情に付き合っただけでなければ、なんとかなるかも知れないな。

そんな淡い期待を抱いていると、救芽井家が見えてきた。さあて！ぬいぐるみを家に運んだら、俺はいい加減勉強しないと！「救済の先駆者」の訓練も大事だが、それにうつつを抜かして入試に落ちたくもないからな。

——って、あれ？俺ん家の前に、誰がいる……。

よく見てみると、救芽井家の隣にある俺の家に、人影が見えていた。兄貴か？でも、今は就職の説明会に行ってる頃だし……郵便にも見えないな。あのシルエット——女の子？

——あ、なんか見つかった。つか、こっちに走ってきた。

「一煉寺！？あんた何しとん？」

俺の姿を見つけるなり、息せき切らして走ってきた彼女は……俺

の顔見知りだった。

「へ、変態君？ この娘——誰？」

いきなり登場してきた第三者に、救芽井はかなりテンパっている。彼女の口から飛び出してきた「変態」というワードに眉を潜めつつ、例の女の子は俺に詰め寄ってきた。

「い、一煉寺！ あんた受験やのに、何をほつつき歩いとんや！あと、『変態』って何や！？ この娘、誰やつ！？」

あー……まさか、この期に及んで、この娘に見られるとはあ。めんどくさいことになってきやがったなあ……トホホ。

——この女の子の名前は、やむらかおじ矢村賀織。

俺のクラスメートにして、唯一の「女友達」だ。

受験と訓練を秤にかけて

桜色の薄い唇。口から覗いている八重歯。

黒髪のセミロングに、やや幼い顔立ち。

フォローのしようがないぺったんこである一方、脚線美には定評がある。

そして小柄であり、俺から見れば頭を撫でるのに丁度いい身長差。

俺達二人のまえに現れたクラスメートの容貌を簡単に説明するなら、まあこんな感じだろう。ちなみに、彼女は四国出身だから地元の方が特徴的だ。

矢村は俺と救芽井を交互に見遣ると、キッと俺を睨みつけてきた。ひい、こええ！

「今が大事な時やのに、ようこんなところで女と油売つとるのお！これで落ちとったら承知せんで！」

「いや、ちよつと待ってくれ矢村！これにはいろいろと事情が…

…！」

「なに？変態君の知り合い？用事なら早く済ませてね。この後すぐに特訓だから！」

「……あのね、救芽井さん。俺って一応、受験生なんですけど」

俺達の行動をデートと誤解している矢村が、なにやらプンスカしている。その一方で、救芽井は人の都合を華麗にスルーして、勝手に俺のスケジュールを侵略しようとしていた。

二人揃って、俺を何だと思ってやがる！

「——さっきから気になつとつたんやけど、『変態君』ってどういうことや？」

「う……！」

矢村は目を細めて、ジーーッと俺を睨みつけている。しかし、

難しい質問をしてきたもんだ。

詳しくいきさつを話そうものなら、どうしても救芽井の素性に発展してしまう。俺一人ぐらいならまだしも、矢村をこのゴタゴタに引きずり込むのは忍びない。

上手くはぐらかすには、俺の弁明ぐらいじゃ足りないだろう。こは救芽井にも協力してもらおうと視線を送――

「この人が私の着替えを覗いてたのよ。だから変態君」

――る前に、しれつと何をぬかしとんじゃあああああッ！

「な、なんやって！？ 一煉寺、あんたいつの間にそんなッ……！」
誤解を解こうと口を開く間もなく、矢村は信じられないものを見るような目を向けて来る。お前もあつさりと信じるなああああッ！
遺憾だ！ 誠に遺憾でござる！ 俺は抗議しようとか口を開くが

……。

「仕方ないでしょ、事実なんだから！ それに、この娘まで巻き込む気！？」

と、そつと耳打ちされてしまい、しゅんと引っ込んでしまう。くう、そんな言い方されたら俺が悪者になってしまうではないか！

「とにかく、私達は忙しいの。これで失礼するわね」

「だから、矢村が言うように俺だって受験勉強が……！」

「あなたの頭脳じゃ、どの道無理よ。それよりあなたには、身体で覚えなくちゃいけないことがたくさんあるのよ」

「ム、ムキー！ そんな言い草ないだろう！」

商店街で迷子になった時のように、救芽井は足速に歩き出していく。俺は自分が選んだぬいぐるみを抱いたまま、なんとか追いつこうと必死に歩いていった。

そんな俺達にほったらかしにされた矢村は……。

「ちょ、ちよつと待ちいやああ！」

やや涙目になりながら追い掛けてきた。餌を取り上げられたペツトみたいだぞ、お前。

「あー……いや、あの矢村？　俺は今ちよつと、重大なトラブルに遭遇しててな」

「トラブルってなんよ！？　一煉寺って、今まで恋愛とか全然やっただやん！　何で今頃、こんな、こんな可愛い娘とおるん！？」

「違う違う、この娘とは別にそういうわけじゃなくてだな……な、なあ救芽井？」

助けを請うように、もう一度救芽井に目を移す。また余計なこと言わないか、ちよつと心配……。

「……ふん！　決まってるでしょ。あなたみたいな変態君とお付き合えるわけじゃない」

ぐふう、これはこれでキツイ……！

で、でも、これでなんとか容疑は晴れた、かな？　俺はチラリと矢村の様子を伺う。

「うーん。やけど、やっぱりなんかおかしい……。一煉寺って、アタシ以外の娘とあんま喋らんし、女子から話し掛けられたらテンパるくらいやのに。それなのに、いきなり『覗き』やなんて……。」

ああああ！　ちくしょおお！　誤解を解きたい！　解きたいけど溶けないいいい！

「そ、そんなにあの救芽井って娘が良かったんやろか？　いかん、いかに！　そやからって、一煉寺は渡せん！　よ、ようし、せやったらアタシやってもつと積極的にならないかんやろな、そやろな！」

おや、何かブツブツ独り言を呟いていらつしやる。つーか、なんかほっぺが桃色になってない？ 顔も微妙にニヤけてるような……。

「い、いちれ——りゅ、龍太ッ！」

心配になつて顔を覗き込もうとしたら、今度はいきなり……名前と呼ばれた？ はて、今まではずっと苗字で呼ばれてたはずだけど。「お、おう。どうしたんだ？」

「つつ、付き合つとるわけやないんやったら、一緒に勉強せんか？ わからんとこ多いやろ？」

「んー、それは助かるんだけど、今の状況だとちよつとなあ……」急に名前で呼び始めた矢村の、突然の提案。それは、成績が常在地獄の底へ激突寸前な俺にとっては、願ってもないことだった。

一見子供っぽいところがある矢村だが、彼女はこう見えても学年上位の成績保持者なのだ。うむ、友人として鼻がデカい。いや、高い。

……だが、今の状況はなかなか辛いものがある。受験勉強が大事なのは事実だが、下手をしたら「勉強した記憶を引っこ抜かれてしまいかねない」事件に巻き込まれてるのも、無視しがたいんだよなあ……これが。

というわけで、俺は恐る恐る救芽井の顔色を伺うことにする。ああ、俺って情けないなあ……。

すると、彼女は何かに気づいている様子で、まじまじと矢村を見つめていた。なにに？ 矢村の顔に何かについてんの？

しかし俺がその意味を考えようとする前に、彼女は俺の視線に気づいてフィツと顔を背けてしまった。くうう、やっぱりこの鬼軍曹から、許可なんて取れるわけ——

「ふん！ そんなに勉強が大事なら、今日一日くらい許してあげる。彼女と好きなだけいればいいじゃない！」

—— おお！？ あんなに格闘術の特訓を優先させようとしてたのに、どういう風の吹き回しだ？ とにかくラッキー！

「あ、ありがと」

「勘違いしないでよねっ！ その娘の気持ちを汲んであげてのことなんだからねっ！」

「わ、わかってるわかってる。ホント助かるよ」

眉を吊り上げ、決して「俺の都合を気にかけてのことではない」と強調する救芽井。そんなこと言わなくても、俺のわがままなんて聞く余裕がないのはわかってますから……。

ところが、俺がその旨を態度で表すと、彼女はさらに不機嫌そうにそっぽを向いてしまった。あれま、なにがいけなかったんだ？

まあ、今はそんなこと考えたって仕方がない。救芽井家の事情を思えば、俺が自分の都合に時間を使えるチャンスは限られてるんだろっし。

今はせつかくの受験勉強の機会を、大切にさせてもらいますか！

「よし。んじゃあ、ぬいぐるみを運んだら、勉強見てくれよな」

「うん、任せとき！」

俺から了解の返事を貰った途端、矢村はパアツと明るい顔になった。おお、そんなに喜ばしいことなのか？

俺のことを名前で呼ぶようになったことといい、なんかいつもと様子が違う。どういうわけか、俺に優しい……ような感じがするな。二学期が終わる前まで——いや、ここで救芽井と会った時までには、彼女ほどじゃないにしろ、かなりツンツンしてる娘だったのに。急にどうして——

——ハッ！ まさか……俺が「変態」呼ばわりされてるのを哀れんで……！？

くううッ！ なんていい娘なんだ矢村アアッ！ 俺がもしイケメンだったなら、ここで交際を申し込んでもいいくらいだ！

だけど、変態呼ばわりの誤解が解けないのは辛い……いや、それでも彼女は味方になってくれているんだ！

そうだ、俺にはまだ……帰れる場所があるんだ！ こんなに嬉しいことはない……！

「ど、どしたん龍太？ なに泣いとん？」

「うぐ、ひつく……ありがとう、ありがとうな、矢村あ……！」

心配そうに俺の泣き顔を覗き込む彼女。おお……いつもならおつかない女友達でしかなかった彼女が、今は美と慈愛の女神に見える……！

「——バカっ」

それだけに、隣で救芽井がそつと口にした言葉は、興奮の余り聞き取ることができなかった。ま、いいよね？

勉強会が不毛に終わってた件について

俺んとこの家は、兄貴と二人暮らし。親父とお袋は県外に転勤してる。

月一で仕送りが来るんだけど、お金のやりくりは基本的に兄貴がやってるんだ。数学の最高点数十二点の俺が、お金の管理なんてやるうとしたら恐ろしいことになるだろうからな。

「ふあゝ、ただいまー……つつても、誰もいないかー」

「お、おじゃ、お邪魔しますー」

昨日のドタバタのせいか若干眠気が残っているらしく、俺はあくびをしながらのんびりと帰宅。その後を、矢村がやけに緊張した様子でついてきた。

あ、そういえば矢村を家に入れるのって初めてなんだっけ。

「いいよ、固くなんなくて。今は兄貴、いないみたいだし」

「う、ううん！ 人様の家なんやし、粗相のないようにせないかんけん！」

いや、だから俺しかないんだって。この妙に頑固なところが、彼女の唯一の欠点——かな？

「……って、え？ じゃあ今、家におるんなは——アタシと龍太だけ？」

「そだな。まあ、この方が静かで勉強する分にはいいだろ？」

もしかしたら、賑やかな方が良かったんだろうか？ ふと気になったんで、ちよつと顔色を伺って——

「せやな！ そらそうやわ！ 二人つきり！ の方が、集中できるやろうしっ！」

おうっ！？ やけに上機嫌じゃないか。なんか「二人つきり」つてのをやけに強調してるけど……ま、本人がいいって言っただから、

いいかな。

「こ、ここが龍太の、部屋なんかあゝ！」

矢村は俺の部屋に入ると、まるで遊園地に来た子供のようにウキウキとしていた。そりゃまあ、初めて来る場所だろうけど……そんなに嬉しいのか？

「別に大したもんじゃないだろ？ 殺風景だし」

「ううん、そんなことないって！」

特に何かのファンというわけでもないから、ポスターみたいな飾り物もない。漫画やラノベ、ゲームがちらほらあるくらいの狭っ苦しい部屋だ。女の子が喜びそうなものなんてないはずだけど……。

「……って、なにしてんの？」

しばらく目を離していると、今度はなにやらベッドの下に潜り込み始めていた。そんなところには何も無いぞ？

「えっ？ あっ、いや！ 龍太はどんなんが好きかなあゝってな！」

「は？」

「な、なんでもないっ！」

訝しげに見る俺の視線に耐え兼ねたのか、彼女は顔を赤くしてプイツとそっぽを向いてしまった。まさか、エロ本でも探してたってのか？ おいおい、俺はパソコンで画像落として済ます派だぜ？

「とにかく、さっさと始めようぜ。まずは現国から頼むわ」

これ以上詮索されては、俺の性的嗜好が暴露されかねん……というわけで、俺は早急に勉強会の開始を進言する。おお、自分から「勉強したい」とか言い出すなんて、俺も成長したなあ……。去年まで、テスト期間中でも何食わぬ顔でゲーセンに繰り出してた頃が懐かしいわい。

「そ、そやな。始めよか……」

矢村はやや名残惜しげに辺りを見渡すと、そそくさと可愛らしいバッグから教科書やらノートやらを出して来る。方言や八重歯、そして快活な性格からか「男っばい^{ボーイッシュ}」と言われがちな彼女だが、持ち物は結構ファンシーなものが多い。

最初の頃はそういったもので、男物のような無骨なものを持ち歩いていたらしいのだが……どういうわけか、今はピンク色が眩しい「少女趣味全・開！」なグッズを多数所持している。どうしてこうなった。

さて、そんな彼女に勉強を見てもらうようになって小一時間。

「漢字問題ぐらい解けなあかんやろ〜！ 文章題は難しいの多いんやけん、ここで点数取つとかな！」

「いや、なんか『これぐらい楽勝！』って思ってた書いてたら『間違いました』っていうのがほとんどなんだよな」

「そーゆーのを、油断大敵って言うんやで！ ほら、これはなんて読むん？」

「えーと、『ちぶさ』！」

「ち・ち・ぶ！ やらしい覚え方しようとするからや！」

……絶賛大苦戦中でございます。

「ああんもう、次！ 熟語の問題や！ 『強いものが弱いものを喰らう』っていう意味の短文やで！」

「よーし、かかってこい！」

「問題文は、『所詮この世は（□□□□）』！さあ、これはなんや？」

「『所詮今夜も焼肉定食』！」

「『所詮この世は弱肉強食』やろツ！ どんだけ腹減つとんねんツ！？」

「いや、よく考えたら昼飯まだだったな〜ってさ」

「しかも空欄以外のところも違つとるしツ！ 腹減りすぎて頭回ってないんじゃないん！？」

うーむ、思った以上に手厳しい。俺がバカなだけなんだろうか？
向こうは俺以上に頭抱えてるし……。

その後は小説の文章問題にも挑んだが、やはり難航した。

「さあ、この後太郎はどう考えたん？」

「次郎をぶつ飛ばしてやろうと思った」

「なんでや！？ 捨て犬を雨の中から拾ってきた弟にすることか！？」

「だってこの兄弟、マンション暮らしなんだろう？ 普通、集団住宅でペットは無理だって。よって飼っちゃダメ。元のところへ捨てて来なさい！」

「この物語のオトンみたいなこと言うなあああッ！」

いや……だってそうでしょ？ 「捨て犬が可哀相」って人情だけで近所さんやお隣りさんは納得させられないだろう？

現に救芽井家がそうだしなあ……。あそこはむしろ、人を自分達の都合で振り回してる状態だし。どうせ俺だけだからいいけど。

この文章題では、太郎は次郎と一緒に反対派の父親を説得しようとしてるけど……俺にここまでの気概はないなあ。途中で諦めて返しちやいそいだ。

結局、昼間の時間を全部使ったの「現国集中特訓」になってしまった。頭の中の予定じゃあ、もつと数学とか英語とかにも時間を割きたかったんだけど。

日が沈みだし、辺りが暗くなるうとしている時間になってることに気がついたのは、ついさっきのことだった。

「もうこんな時間か……そろそろ切り上げるか？」

「そやな……まるで成長しとらんけど、今日のところはこれまでやな」

ぐふっ、マジかよ。これでも長時間脳みそフル回転で頑張ったつもりだったんだけどなあ。

「できれば、英語の勉強とかもしたかったんだけどなあ」

「……龍太、月曜日は英語で何て言うん？」

「え？ んーと、『モンダイ』」

「『マンデー』や。……ホント、『モンダイ』外やな、あんた」

ムツ、そんなひどいこと言わなくなっただけいいじゃないか！ なんだよ、その冷やかな目はっ！

「なあ、龍太。もしよかったらやけど……」

「ん？」

勉強道具を纏めて、帰る準備している矢村が不意に話し掛けてきた。心なしか、声が震えてるような……気がする。

「家まで、送ってもらっても、ええかな？ 勉強頑張ってくれたし、息抜きに、ちょっと寄り道しながら……とか」

少しモジモジしつつ、今にも消え入りそうな声色で、そう提案してきた。まあ、今日一日付き合わせちゃったんだし、そのくらいお安い御用だよな。

「ああ、いいぜ。一緒に行こう！」

「い、一緒に……！？ う、うんっ！ ありがとうっ！」

感極まった顔で、彼女は深く頷いた。うーむ、そんなに喜ばしいことなのかな？

——そうか、そんなに俺が「変態」呼ばわりされてることを哀れんで……！

「グスン、いってことよ……さあ、行こうぜ」

矢村の慈愛に、俺は再び泣いた。暖かい、なんて暖かい娘なんだ！ それに引き換え、俺の惨めさときたら……うつっ。

「ど、どしたん？ 大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ……心配してくれて、ありがとう……！」

せめてもの恩返しとして、自分が元気を貰っていることをアピー

ルしようと、俺は爽やかにスマイルを見せる。すると、彼女はボンツと顔を赤くして俯いてしまった。あれ、なんかマズかったかな？

何が恥ずかしいのか、赤面したまま喋らなくなってしまった彼女の手を引き、俺は玄関の前まで来た。さあ、彼女を送ったらまた勉強だな……。

いや、もしかしたら今日勉強に集中した分、救芽井にめっちゃくちゃしごかれるかも……！？

そんな不安要素を抱えつつ、ドアを開けた俺の前に立っていたのは――

「お？　なんだ龍太、彼女連れて夜のデートか？」

「弟さんですか？　初めまして、古我知剣一です」

就活帰りの兄と――あの、古我知さんだった。

悪の親玉、イン・マイホーム

ちよつと、待て待て待て……！

え？ 何この状況？ 何で悪の親玉とこんなタイミングで鉢合わせしなきゃなんないの！？

「ああ、こつちは就活説明会の時に、落とした財布を拾ってくれた人です。お礼にちよつと飯でもご馳走しようつてとこだったんだ」

古我知さんについての説明を入れて来てるのは、俺の兄貴・一煉いちれん寺龍亮じりゅうすけ。もうじき就職活動にのびのび取り組もうとしてる、大学三年生だ。

こやつは俺の血縁者である癖に、頭も顔も運動神経もよく、道を歩けばいつの間にか女に囲まれてる。まあ、つまるところ「月の果てまで爆発するべきリア充野郎」というわけだ。

この憎たらしい兄貴のおかげで、俺がどれほど惨めな思いをしてきたのかを知るものはいまい……。二人で町を歩けば、兄は羨望の目で見られ、俺は哀れみの目で見られるッ！ 同じ兄弟だというのに、なぜここまで違うッ！？

俺は必ず兄貴を引き立てるためのピエロにされ、「お兄さんを見習いなさい」と言われる毎日だ！ なぜだ！？ ……坊やだからか？

そんな俺だからか、いじめの対象にされることもあった。それを見兼ねて、兄貴は俺に護身術としての少林寺拳法を教えてくれた。

……まあ、そこは素直に感謝しとこう、かな。

——つて、今はそれどころじゃねーッ！

くせつ毛のある茶髪を掻きむしり、兄貴は少し困った様子で俺と古我知さんを交互に見ている。客人に妙に警戒してる弟を、どう紹

介すべきか考えあぐねている……という感じだ。

——そういえば、古我知さんはずいぶん優しいな笑みで俺を見るけど、何で何食わぬ顔で突っ立ってられるんだ？ 自分が狙う獲物なら、もっと睨んできても良さそうなんだが……。

「元気の良さそうな弟さんですね。なんというか、昔を思い出します」

「ああ、まあちょっとバカなところはありますが、根は悪い奴じゃないんで。気にしないでくださいね」

この人の正体を知らないであろう兄貴は、人の気も知らないで呑気なことを言っている。あのなあ、自分の肉親を狙ってる敵にわざわざ紹介すんなっつーの！ まあ、知らないんだからしょうがないんだけどね……。

——古我知さんめ、余裕こいた顔しやがって……「お前なんかいつでも捕まえられる」って言いたいのか、こるあー！

と、気づかぬ内に顔に出ていたらしい。その場で兄貴に「お客さんにガンつけてんじゃねーよ」と、ゲンコツを貰ってしまった。いてて……。

——だけど、落ち着け。こんな時こそ、冷静になるんだ！

ここで古我知さんの正体を訴えるのは簡単だけど……はぐらかされるかも知れないし、下手したらここで暴れられることも考えられる。そんなことになったら、兄貴も無事じゃ済まなくなるぞ……。

だが、ここで何事もなかったかのように素通りしたら、兄貴と古我知さんは二人つきりになる。そうになったら……アッー！

——じゃなくて、商店街の火事みたいに危険な目に合わされるかも！

……いや、ないな。それだったら隣の救芽井家が黙ってないし、兄貴に危害が及んだら俺が警察に通報して終わりだ。

「技術の解放を望む者達」だって警察沙汰が嫌なんだったら、余

計に暴れるのは避けたいはずなんだから。

——つまり、彼が兄貴に手出しするメリットはナシってことか。
ここは何も知らない振りをして、出て行った方が得策なんだな……。

「全く……いいから、お前はさっさと彼女とデートに行つてこいよ」
すると、いきなり兄貴が変なことを言い出した。こんな時に——
彼女？

「彼女って、矢村が？」

「ん？ 違うのか？」

あっけらかんとした俺の対応に、兄貴は目を丸くして矢村の方を見遣る。彼女は俺の後ろで顔を赤くしながらペコペコしていた。

「どう見てもただの友達には見えないんだがなあ……」

「んー、そうかあ？」

「ももも、もーえーやん！ そんなことより、はよ行こうやつ！」

俺と兄貴が兄弟揃って首を傾げていると、矢村はいたたまれなくなつたのか大声で叫び出した。

「ええ、それがいいですね。お二方、もうじきクリスマスですから

……素敵な聖夜を楽しんで来ては？」

古我知さんも面白げに、彼女の背中を押すようなことを言う。なにが楽しいんだよ、あんたは！

あーもう、調子狂うな全く！ とにかく古我知さん！ うちの兄貴にアツー！ ……じゃなくて、妙な真似したら即通報だから！
「おまわりさんこいつです」って訴えてやるからな！ 覚悟しとけよっ！

迂闊にアクションを起こして暴れられたら敵わないしな……向こうも警察呼ばれると困るんなら、大人しくしてるしかないだろうし。後ろ髪を引かれる気分ではあるけど、今はどうすることもできない。
「しょうがねえ……行こうぜ、矢村」

「う、うん」

俺は何事もなく「古我知さん」という名の嵐が通り過ぎることを祈り、矢村を連れて家を出ることにした。

クリスマスが近いというだけあって、外はなかなかイルミネーションが盛んだ。住宅街だけでも、そこかしこにクリスマスツリーの飾り付けがあったりする。

ちよつとリッチな家庭では、サンタやトナカイのオブジェまで飾られていて、なかなか見栄えがいい。いいなー、俺ん家なんか、家にちっちゃいツリー型ろうそくがあるくらいだぞ。

「商店街の方とかだったら、もっと派手なのがあるかもな。朝行つた時も、結構人通りが凄かったし」

何気なくそう言うてみた。……言っただけだったのだが、何かがいけなかったらしい。

それまでホクホク顔だった矢村が、急にムスツとした表情になってしまったのだ。解せぬ。

「……むう」

「あれ？　なんか変なこと言っただか、俺？」

「それって、あの救芽井って女の子が行った時やろ……」

「そうですが、何か？」

「やっぱりや！　もおおッ！」

すると、矢村は何が不満なのか「ムキーツ！」と怒り出してしまった。くう、救芽井の態度といい、どうやら俺は「無意識のうちに女の子の機嫌を損ねてしまう」スキルの持ち主らしい。

こないだ、兄貴がモテない俺のために「ときメモ」とか「ラブプラス」とか買ってきてくれたけど、正直まともにクリアできる自信がないぞコレは……。

「だいたい、救芽井って言ったら最近引越してきた迷惑行為常習犯やんツ！ 龍太やって被害者やのに、なんでそんなこの娘と一緒ににおるん！？」

あー……まずいぞ。またしても救芽井家の事情に関わりかねん質問が飛んで来やがった。

「アタシの方が付き合いても長いのに……あんたの面倒も見れるのに……なんで『救芽井』なん？」

おや？ 今度はなんだか急にトーンダウンしてしまったみたいだ。なんだか縋るような上目遣いで、俺の顔をジツと見つめている。

……「クリスマス」っていう「ムード補正」のおかげかも知れないが、めっちゃ可愛く見えてきた。大丈夫か？ 俺……。

桃色の唇に、雪みたいに白い肌。普段あんまり意識してない分、矢村のそういうところが目についちゃうと、なんかドギマギしちゃまって気まずいんだよなあ。

——そういや、兄貴も古我知さんも、矢村を俺の彼女みたいに言ってたつけ。いかん、意識したらいかんぞ！ 向こうからしたら、ただの男友達なんだから！

……と、俺が一人で勝手に脳内暴走しているうちに、いつしか俺達は昨夜の公園にたどり着いていた。

「——あちゃー」

もちろん、あれだけ大暴れした後の損害が元通りになってるはずもなく、公園全体に警察が調査した跡があった。そこら中にビニールシートやら立入禁止の注意書きやらがいつぱい……あーあー、警察の介入は困るって話はどこに行っちゃったんだ？

こんな調子じゃあ、遅かれ早かれ救芽井家が「技術の解放を望む者達」が嗅ぎ付けられちゃうだろうに。近所迷惑、ここに極まれり。「なんやコレ！？ めちゃくちゃやん！」

当然、何も知らない矢村はあわてふためくばかり。うわあ……別

に俺がやったわけじゃないんだけど、関わった者として凄く申し訳なくなってくる……。

「と、とにかく、早く行こう。家はこっちであってたかな？」

これ以上ここにいたら、今度はこっちがいたたまれない！ 俺は矢村の手を引いて、その場を離れることにした。

それからしばらく住宅街を歩いていたのだが……会話がない。まるで、商店街から帰る時の救芽井みたいだ。

——手を繋いでるせいだろうか？ 俺は恐る恐る、手を放して彼女の表情を伺う。俺、最近人の顔色ばかり気にしてるなあ……。

「——ねえ、龍太」

「な、なんだ？」

俺が握っていた自分の手を見つめて、か弱い声で呟いている。あ、まさか手を握ったことを怒ってらっしやる？

いくら「変態」呼ばわりされてることで心配してくれてるって言っても、これはちとやり過ぎだったんだろうか……。ああ、なんてこつたい！ せっかくの慈悲を、俺はああッ！

「こうして、手を繋いでくれた時のこと……覚えとる？」

——と後悔していたら、彼女はそんなことを口にしていた。顔を、トマトみたいに赤くして。

手を繋いだ時……ねえ。それだったら、ずいぶん前になるなあ。

あれは——そう、中学一年の夏。

俺と矢村が、初めて会った頃だっけ。

転校生は方言少女

二年前、夏休みになる少し前のこと。

クーラーの効いた部屋から一步出たが最後、脅威の灼熱地獄に身を焼き尽くされ——そんな季節のただ中に、俺達は初めて出くわした。

「もうすぐ一学期も終わりだが……その前に、今日は転校生を紹介しようと思う！」

期末テストが終わってすぐ、若い担任の先生がそう切り出した途端。俺達はいきなりのニュースにざわめきまくっていた。

ただでさえ生徒の雑談でやかましい教室が、いつそう騒然となっていました。

男か女か。可愛いイケメンか。それぞれが思い思いの理想像を垂れ流し、話題に花を咲かせる。

「では、入りなさい」

静かにしろ、というよりはそう言った方が、皆が静かになると判断したのだろう。先生は騒ぎ立てる俺達を放置して、廊下で待っている転校生を招いた。

彼の思惑通り、「話題の張本人」である転校生がどんな奴なのかを一目見ようと、クラス一同はお喋りを忘れて静かになる。

そして、ゆつくりと教室に入ってきたのは——女の子。それも、黒くて長めの髪が綺麗な、相当の美少女だったのだ。

もちろん、真っ先に歓声を上げるのは男子。女子もまた、余りの可愛さに羨望の眼差しを向けていた。

転校生の女の子は、そんなクラスのテンションに怖じけづいたのか、カクカクと足が震えていた。教卓の前の席だったために、その

様子がよく見えていた俺は、小声で「頑張れ」とエールを送っていた。

別に、美少女の出現に歓喜してる他の男子程、彼女に関心があったわけじゃない。ただ、見ていて子供心に「かわいそう」だと思っただけだ。

俺の言葉に、彼女は小さくコクンと頷く。そして、男子の喧騒に怯えながら黒板に自分の名前を書いていった。

「や、矢村賀織、です。よ、よろ、よろしくお願いします」

緊張気味なのか、矢村という女の子は何度も噛みながら、懸命に自己紹介を試みていた。やがて、そんな彼女に救いの手を差し延べるように、先生が前に出る。

「彼女は四国から来た子だ。知らない町でやっていけなくちゃいけない分、苦労も多いと思う。みんなで、なんとか助けてやってくれ」
実に真つ当な台詞で締めた先生に、同意の声が次々と上がっていく。これならきっと大丈夫だと、俺はホッとして矢村の綺麗な顔を眺めていた。

その時、俺は彼女と目が合ったのだが、向こうは俺のことが気に食わなかったのか、フイツと顔を逸らしてしまっていた。

一時はクラスでの質問責めに遭い、ビクビクしていた彼女ではあったが……次第にクラスに馴染んでいくうちに、本来の明朗快活な性格を見せるようになっていった。

その上やたら体力があり、男子に混じってサッカーやテニスに参加し、互角以上に渡り合っていた。それどころか、腕っ節で勝るとすらある。

転校してきた当初のイメージをぶち壊す、男よりも男らしい女の子だったわけだ。

夏休み中も、二学期が始まってからも、彼女は男子以上に活発に

動き回っていた。

それは別にいいことだろうし、性格的にも悪い奴じゃないと思う……のだが、困ったところが一つだけあった。

「一煉寺イ〜！ あんた男やろ、しゃんしゃんせんかい！」

「ちょ、や、矢村、タンマツ……！」

——やたら俺を連れ回す、という点である。大して運動が好きでも得意でもない、俺を、だ。

なぜかはわからないが、彼女はサッカーやら野球やら柔道やら、俺が普段関わらないようなスポーツの世界に容赦なくぶち込んで来るのだ。

当然、俺は耐え兼ねて音を上げた。そんな俺の尻を、彼女がひっぱたく。それはもはや「お約束」だった。

まあ、それはそれで運動不足の解消になったんだし、よしとしよう。

そうして、矢村は男子よりも強い女子として、その地位を高めていた。このままそれが続いていたなら、彼女の中学時代は実に充実したものになっていたに違いない。

しかしある日、俺は彼女をやっかいなトラブルに巻き込んでしまったのだ。

運動も勉強も中途半端でありながら、成績優秀・スポーツ万能な矢村と一緒にいる俺は、異端だったんだろう。なんの脈絡もなく、俺は出来のいい兄と比較される形で、一部の連中からいじめに遭った。

兄貴がその優秀さで有名なのは知っていたし、弟の俺がふがいなのも事実だった。だから、俺は抵抗することなく、いじめを「一

一般的な世間の評価」として受け入れることにしていた。

——だが、矢村はそれに反対した。

彼女は俺をいじめていた連中に突っ掛かると、全員にビンタをお見舞いしたのだ。「一煉寺は一煉寺、兄貴とはなんの関係もないやろが!」と。

まあ、向こうはただ俺をいじめるための話題が欲しくて、兄貴を引き合いに出しただけらしいんだけどな。

だが、そこで連中は逆上してしまった。元々、彼らは俺のように勉強や運動で矢村に劣る「落ちこぼれ」であり、男勝りで勝ち気な彼女を快く思わない存在だったのだ。

俺をいじめようと思ったのも、彼女を狙うと支持層が黙ってないから。だから、代わりに「八つ当たり」をしようとしていたんだ。

連中は持っていたモップや椅子を振り上げ、矢村に殴り掛かろうとした。いくら男より強い彼女でも、数人に凶器を持ち出されたらどうしようもない。

俺は自分の撒いた種だからということ、彼らに飛び掛かって彼女を逃がすことに決めた。

別に、俺が殴られるのは構わなかった。どうせケン力は弱いんだし。

それに、俺の代わりに彼女が殴られたりなんかしたら、そっちの方がよっぽど「痛い」しな。

だけど、俺が殴られて血まみれになった時の彼女は、まるで自分が殴られたかのように悲痛な顔をしていた。

結局、その件は矢村が呼んだ先生によって解決された。俺をいじめていた連中は全員、停学もしくは転校を余儀なくされ、俺は一週間の病院送り。ケガは正直めちやくちゃ痛かったけど、矢村が無事

だったのでよしとした。

——その時にわかったのは、矢村が羨望や尊敬と同じくらい、妬みを買っていたということだった。文武両道で美人だけど、そんな彼女を嫌う奴もいる、ということだ。

他にも、彼女を否定する人はいた。方言を陰でからかう女子や、盗撮を働こうとする男子。クラスのみならず、学年全体で見ても人氣者だった彼女は、同時に敵も作ってしまっていたのだ。

俺はそんな裏側を知ってから、矢村との付き合い方を変えた。連れ回されるんじゃなく、自分から彼女と一緒にいるようにしたんだ。どんな時でも、彼女を一人にしないように。陰で彼女をバカにしてる連中の、盾になるように。

そうしていくうちに、いつしか「彼女の方が」俺について来るようになっていた。聞いた話によると、この頃から彼女の持ち物は「男らしいもの」から「可愛らしいもの」へと激変したらしい。やはり解せぬ……。

「もしかして、俺のことを好きになったんじゃない？」

——なんて、バカな妄想もしたことがあるが……我ながら、勘違いも甚だしい。いじめられっ子に惚れる女がいるか？ しかも相手は男勝りと評判の矢村だぞ……ありえねえ。

ま、そんな恥ずかしい黒歴史はどうでもいいか。

矢村は、自己紹介の時に励ましてやったことを今でも感謝してるらしく、それが俺をスポーツに誘っていた理由だと言っているのだが……はて、だからといって勉強まで見てくれる程の恩義を感じるもんなんだろうか？

じゃあ、暴行されそうになったところを助けたからか——って、アレはそもそも俺がいじめられてたせいだもんなあ。

うーん、矢村っていつも俺の世話焼いてくれるけど……イマイチ動機が見えないんだよなあ。

いつか、彼女の気持ちがちゃんとわかる時は——来るんだろうか？
来たらいいなあ。

その方が、スッキリすると思うから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4865z/>

着鎧甲冑ヒルフェマン

2011年12月30日22時46分発行